632-171
1200501541882
32
171

598

高田治吉著

作歌手記

東京 古今書院發行

作歌手記

高田浪吉著

東京 古今書院發行

632-171

序

本書は私の第三歌論集である。今回は隨筆風の文章二三を加へて纏めることにした。震災記の文章は稚拙であるが、痛切な體驗を一生懸命に言ひ表はさうとしてゐる點が多少の取柄であつて、私の藝術觀も震災などに依つて劃期的の變動を與へられたと言つていいかと思ふ。震災記は必しも本書の骨髓をなすものではないが、歌道に生きようとする私にとては、捨て難い一產物であつたので、これが歌論にも反映してゐないとは限らぬ。私をして猶歌道に精進するの氣持を繼續せしめるものは、アララギの存在であり、恩師島木赤彥先生の薫陶であり、さうして震災の大きい體驗も亦その基底に數ふべきであると思ふ。私の歌論の骨子は、アララギの歌風が根源となつて出發してゐるのであるが、今日の私の立場は稍反省的な角度から現歌壇を振返らうとしてゐる所にある。現歌壇の歌論の動きの中には

歌には甚だ縁遠い科學的の術語の羅列によつて歌の本質を究めて行かうとする傾向もあつて、初學者の理解を苦しめる點が多いと思ふ。本書はさういふ點も考慮に入れた上で平易に歌の本質に觸れて行かうといふ念願を以つて論旨を進めたものであるから、かういふところが大方の期待に添ふを得ば、望外の幸である。

昭和十年三月十五日　高田浪吉識

目次

現代の短歌と萬葉集……一
「長城を踰ゆ」を讀む……三五
子規の歌論……三八
「アララギ故人歌集第一」評……四四
紫塵集評……六三
歌壇の情勢……七〇
歌壇鳥瞰……七四
斑雪を讀む……八五
土田耕平氏の歌……九三
其四集概評……九八
築地藤子氏の歌……一〇四

啄木について……一〇八
峠路評……一一一
昭和八年度版年刊歌集寸評……一一〇
短歌といふもの……一二八
選歌餘談……一五三
短歌をおもふ……一六七
「紫草」概評……一七〇
歌をよむ生活……一七四
歌よむ者の日記……一七九
短歌の技巧……一八五
正岡子規に學ぶ……一九五
雜感……二〇九
中村先生の思出……二一五

平福先生追憶記……二三一
加納曉氏を悲む……二三六
加納曉と僕……二三九
晩年の松倉米吉君……二四三
通夜……二四八
米吉君歿後の事など……二五五
赤彦先生の選歌……二六一
先生と金のこと……二六三
九月一日……二七一
災害の後に……二七一
（終）

作歌手記

現代の短歌と萬葉集

短歌として本質的のものが、萬葉集の歌の影響を蒙つて發達したのは、一體何時の時代からであつたらうか。歌壇史の上にこれを大摑みに考へると、先づ源實朝が具さに萬葉集の影響を受けて全人格の上に顯現した觀がある。これは誰人も承認していい事實である。實朝の歌を高く評價したのは賀茂眞淵であり、正岡子規であり、齋藤茂吉氏によつて作歌全體に及ぶ克明な批判があつて、その眞價は搖がすことのできないものとなつた。實朝が二十代の若さであれだけの作品を世に問うたといふことは、驚異に價する事實である。實

朝の歌は初歩の時代から堅實な歩み方を示してゐるのであつて、これはまことに不思議である。齋藤茂吉氏は云ふ、「實朝は、新古今集を讀み、古今集を讀み、藤原定家の教を受けながら、萬葉集を得てそれらの歌集から多くの影響を受け、その歌を本歌として本歌取（ほんかどり）の歌を盛に作つてゐる。その間に、實朝獨自の歌境を表出してゐるが、實はいまだ初途にあつたものと看做すべきである。つまり、實朝は歌人としてもいまだ初途にあつて、殺されたと謂ふべきである。」成程、實朝は、「初途にあつて殺された」のであるが、晩年に於ける彼の作品は初途とは云へぬものが表現されてゐる。

山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた
心わがあらめやも　　實朝

この作品などは、決して初途の人の歌ではなくて、堂々と時代の大きい動きの中に參入してゐる。もし、實朝が長命にして時代の大きい動勢に立對つて辛苦するところがあつたならば、實朝の生涯はいかなる方向に轉廻してゐたか分らぬが、歌人としての實朝が果してそれに並行したであらうか。

實朝は、萬葉集の技法を會得して、調べの上に、歌境の上に、一大變化を實現してゐるのであるから、萬葉集の歌のよりよき點を認むることによつて、實朝の歌風の長所を見出だすことができるのである、實朝の歌の高さは、萬葉集の歌の高さが分れば分る程、その眞價が認められてくるのである。その內容に至つては、實朝の全人格の表現であつて、萬葉の歌の色合と異つたものを顯現してゐる。萬葉集に生き得た人が實朝であつた。けれども、實朝は萬葉集の爲に自己を沒却はしてはゐなかつた。歌の爲にすべてを忘却しようとはしなかつた。然るに、後代正岡子規が、日本の歌壇の人々に與へた影響は、歌の爲に身命を賭して憚らぬ信念を抱かしめた。これは、萬葉集の眞價が多くの人々に認められれば認めらるる程、歌への精進の容易ならざる傾向を生じて、性命すら歌の爲に惜しまぬといふところまで來つたのである。子規の病床生活狀態が、一個の藝術家としての惱みであり、人間生活上の苦鬪であつた。そこに反映する精神は、一面、萬葉集への研鑽と實際への作歌行動であつた。子規は、身命を賭してまでも作歌せよ、とは云はなかつたが、偶々子規の病床生活は、歌人の抱（いだ）くべき藝術上の信條をそこまで向上せしむるものがあつた爲

に、少くとも年少の歌人に身命を賭してまでも作歌しようとする精神が培はれたのは明らかな事實である。現代幾多の若い歌人は、歌道を自己の本分として最後まで歌を詠むことに心を沒入してゐる。現歌壇の人々は、これを記憶すべきであり、短歌の實際行動が如何に貴重なところまで押進められたかを知るべきである。さればと云つて、それらの人々が、必ずしも歌の爲に身命を縮少したとは斷言できないのであつて、歌は一面、苦惱の生活を脫却するの手段でもあるのであるから、作歌行動に據つてより深く自己の向上を圖ることもできるのである。寧ろ、短歌は生活の反映となつて民族的の心理を發揚するところにも眞理がある故、短歌の世界が向上してゆけば、これに越したことはないのである。そこで短歌を學ぶには如何なる方法を以つてするかと云へば、云ふまでもなく萬葉集の歌の調べを學べと云ふことになるので、子規歿後の歌壇は、作歌者の萬葉集研究となり、萬葉調の實行運動ともなつたのである。僧良寛、平賀元義らも純粹な萬葉調歌人であるが、こゝでは、現代人として、伊藤左千夫、長塚節らの作品の萬葉調に就いて再吟味をしてみようと思ふ。

御題新年海（錄三首）

左千夫

あきつ神わが大王（おほきみ）このあした海の大御歌（おほみうた）遊ばすらしも

天地（あめつち）のみたまつつしめわが國の國つつとめは海の上（うへ）にあり

ひむがしの海の眞面（まも）にさかえたつ大八洲（おほやしま）國春立ちにけり

明治三十六年

節

初雪

一月二十日、きのふより夜へかけて降りつづきたる雨のやみたるにつとめておき出でて見れば筑波の山には雪のふりかかりたればよめる歌六首（錄三首）

おぼほしく曇れる空の雨やみて筑波の山に

雪ふれり見ゆ
よもすがら雨の寒けくふりしかば嶺の上に
は雪ぞふりける
をのうへにはだらに降れる雪なればここの
あたりはうべ降らずけり

明治三十六年

右に抄出した二氏の歌が、作者の代表歌ではないのであるが、岩波文庫本の、「左千夫歌集」「長塚節歌集」中、明治三十六年の始めへ掲載されてゐる順次に據つたのである。左千夫の歌三十六年作は、作者四十歳の時である。節の三十六年作は、作者二十五歳の時である。兩作者の作品が、純然たる萬葉調であつて、古今集趣味、新古今集趣味を加へてをらぬところに特長がある。當時行はれた所謂萬葉調なるものは、古語の羅列にとどまるものが多かつたが、これらの作品は、あくまで自己の感情に立脚してゐて、調べが形式的に墮入つてゐないのである。一面には、左千夫の歌の場合のごとく、古典趣味の匂ひが無いでもないが、調子が浮動してゐないと云ふ點、部分々々の句法に微妙な變化があると云ふ

點、古人の誰人をも凌駕しようとする意氣込み、かういふところを觀察すべきであらう。「大御歌遊ばすらしも」の云ひ方などは、古歌集に深い理解がなければ云へないところである。「國つつとめは海の上にあり」これらの句法にしても新鮮な現代人の感情を、さながらに述べてゐる。節の歌の場合にあつては、いまだこの作者のものとして、力強く個性が發揮されてゐないが、いかにも自然流露の詠風である。雨がやんで、遠くの山に雪の降るのが見えたといふ表現は、やはり近代的の感じ方であつて、微妙な時間の感じを現はしてゐる。現今の作歌者は、かういふところの平凡さを、なんの氣なしに輕々しく取扱つて了ふであらうが、この感じ方は申すまでもなく現代のものである。「よもすがら雨の寒けくふりしかば」などにしても、感じ方の上に深い訓練が盡くされてゐる。現在かういふ議論をすると苦笑する人もあるかも知れぬが、萬葉調の發達は、句法のみの工夫でなくて、感じ方に微細な變化を迎つて、いかにその上に苦勞してきたかにある。然して、萬葉集に對する尊敬の念は、とりもなほさず歌人として自己完成への賴りであつて、現代の歌人は多くそこに活動した觀がある。或ひは萬葉集の歌風などを賴りとせずに、一途に現實へ突入

して積極的な自己表現によつてよしとする人々もあるが、それらの人々が果して萬葉集を
讀んでゐないであらうか、尊敬してゐないであらうか、恐らくそれらの人々でさへ、萬葉
集の眞の價値は認めた上の實際運動であらうと思ふから、表面的に、形式的には、萬葉集
の技法が目立たなくとも、底の方に萬葉集の息吹がかかつてゐるのではあるまいか。現今
では萬葉調の歌でなくては、短歌の本道ではないといふ説を積極的に唱ふる人はゐないで
あらうが、根本に於いては、萬葉調によつて、現實の世界を表現することがよいのである
から、いま歌を初歩から學ばうとする人があつたとしたならば、先づ萬葉を鑑賞せよ、と
云ふことになるのである。このやうな理論に反感を抱く人々も亦多く存在するのは否めな
い。北原白秋氏の過去の作品等には、全然、萬葉集の調子は見受
けられない。與謝野寛氏、同晶子氏等の作品になれば、萬葉調が忘却された觀があつて、
自由蕪雜な内容に由つて、三十一文字の形式を生かさうとしてゐるのである。驅使されて
ゐる詞に魅力があつて末梢神經をそそるところ、異常神經の呈露であると看てもよい。現
今の歌壇の空氣から遠く離れて屈託なく作歌してゐるところに、この作者の自由なよろこ

びがあるのであらう。空想的で夢のやうな調べが或時代を風靡したのであるから、その面
影は近頃の作品の上にも偲ばれるものがあつて、一部の人を惹きつけてゐる。いま過去の
歌を取上げて問題にしてみる。

かざしたる牡丹火となり海燃えぬ思ひ亂る　與謝野晶子
ゝ人の子の夢
圓山の南の裾の竹はらにうぐひす鳴けり御
寺に聞けば
水引の紅き二尺の花引きてやらじと云ひし
朝霧のみち

右は、明治三十七八年頃の作であらう。いかにも夢のやうな境地である。ある時代の讀
者はかういふ歌柄に眩惑されたのである。韻律の上には不自然さはないが、自然觀照の上
に淺薄感が伴ふのである。ただ見逃がしていけない事は、これらの作品には、三十一文字

の調べといふものを悟つた何かが閃めいてゐることだ。調子に一皮剝けたところがある。「圓山の」の歌には分り易い調子がある。かういふ歌も偶には交つてゐるのである。根岸短歌會あたりの歌の影響とみても差支へない。他の二首に至つては、夢のやうな作品であつて、非現實的のものである。北原白秋氏の短歌は、晶子氏の歌風の影響の著しいものであるが、その一例を氏のずつと古い作品の中に求めるならば

かくまでも黒くかなしき色やあるわが思ふ
人の春のまなざし　北原白秋

右の一首が白秋氏の過去の作品を代表するものではないが、やはり韻律の上に不自然さはなくとも、自然觀照の上には淺薄感が伴ふ。

さすたけの君が御庭の沙羅の花夕かたまけて見ればかなしも

この歌の如きは明らかに萬葉振りであるが、萬葉の形式のみの模倣にとどまつて借物といふ觀がある。氏の最近の歌風に就いては後章で又述べることにするが、とにかく白秋氏

は、萬葉集のよいところを認めようとしてゐるのであるから、氏の努力は買ふべきであらうか。若山牧水氏の大正十年頃の作品に於いてみられる如き萬葉振りの作品は、氏の作歌上の一大變化とみて差支へないであらう。

起き出でてみるあかつきの裏山の紅葉の山に雪ふりにけり　若山牧水
上野と越後の國のさかひなる峰の高きに雪ふりにけり
はだらかに雪の見ゆるは檜の森の茂れる山に降れる故にぞ

牧水の歌は、ここまで自然觀照が行きとどいて來たのであつて、この歌は明らかに萬葉調と云ふべきである。牧水がかういふ歌を作るやうになつたのは、一寸此作者らしく感ぜられないのであるが、當時の歌壇は、萬葉調を主とするアララギの歌風の隆盛の時であつ

て勢ひ牧水をしてここに至らしめたといふ觀があつたのである。牧水のこの行き方は損ではなかつたのであるが、牧水がもつと長生をして、かくの如き作品が或時代の副産物となつて、漸次自己本然の姿を力強く發揚したならば意義があつたらうと思ふのである。けれども牧水は決して自己本然の姿を失つて死んでゆきはしないのであるから、これらの作品に據つて牧水の全價値を云々するのは早計であるかも知れない。牧水にアララギの歌風の影響があつたと云うても、牧水には牧水としての別個の立場があり、萬葉集の本然の姿を看ようとしてゐたのであるが、ただその當時は、萬葉集を極力讃歎することを避ける傾向が歌壇一般にあつたので、萬葉集の實際價値の批判に觸れようと努めなかつたのは牧水のために遺憾に思ふ。さて萬葉集の歌の眞價値を極力追尋してやまなかつたのは、アララギの人々であつて、就中、齋藤茂吉・島木赤彦等によつて實行されてゐたのである。萬葉調が今日根強く歌壇に瀰漫したのは、アララギの存在と、茂吉、赤彦の言說の力强かつたのに起因してゐるので、これは最眉目でなくて、誰人も作歌に携はる人々の承認していい事實であるまいか。玆で歌集「赤光」からいかなるところに萬葉調としての特長が見出だされるかを吟味してみよう。

折に觸れて（錄三首）

茂吉

はるばると母は戰を思ひたまふ桑の木の實の熟める畑に

たらちねの母の邊にゐてくろぐろと熟める桑の實食ひにけるかな

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは大きかりけり

明治三十八年

作者、二十四歳頃の作である。作者が歌を作り始めた頃の作品としては、いかにも句法が完成されてゐる。これらの歌には、まだ「赤光」が特色として持つ異常な自然の觀方は親へないが、調べに手堅いところがある。現今の歌人は、かうした作品には、此作者らしい特色は無いと看るむきもあらうが、作者の本然の姿はかういふところにあると觀察するのも失當ではあるまい。「桑の木の實の熟める畑に」とか、「桑の實食ひにけるかな」と無

造作に云つてゐるが、これらの表現は、珍らしい訣でもなく、異常な句法でもないのであるが、何か自然と人生との對立を想像せしめるものがある。時代に對する意識の強さが今更のごとく考へられまいか。氏の歌風には何時もかういふ時代意識と云ふものが感じられてくるのは否めない事實であらう。

島木赤彦には、明治三十八年に、新體詩の形式をもつて發表された「諏訪歌」と云ふ一連がある。二三首を抄錄してみる。

赤　彦

健御名方神のみことの神うつり御座高知り
いや古の國
たたなはる嶺高圍むみづうみに冬さり來れば氷はる國
なまよみの甲斐が根を超え三千尺の高原の
湖にみ船こぐ國

作者、二十九歳の時の作品である。これらの歌は、古典趣味に停滯するやうに見えて、その類型に墜ちずに、調子が大らかであつて動きがとれてゐる。技法の點に、子規、左千夫の歌の影響の甚大である事は否めないであらうが、作者獨自の觀察があつて、追從をゆるさざるものがある。赤彦の歌風を論ずる人々は、「馬鈴薯の花」以前に於ける、「山上湖上」所輯の右の一連を看過してはなるまい。三十八年と云へば、左千夫の歌では、「明治三十八之壽歌」がある。二三を錄してみる。

左　千　夫

ひむがしに天地ひらく國力ちからは展びて
年明けにけり
ひむがしの大海ばらに年明けて光こごしき
國あらはれぬ
しきしまの日本の國に天津日の照りし時よ
り始めての年

これらの歌の上に現れてゐる感動は、人麿等の歌風の影響であつて、「大君は神にし在せば」と云ふ思想と看てよい。句法の上に微妙な工夫が成されて新らしい形式を生んでゐるのである。

さて、萬葉集の歌風も、藤原朝以前の作品となると、純朴な人と人との感傷の交錯とみて味ふ可きものがある爲に、相聞歌、挽歌等の作品の大部分の根本は、一種の感傷味と看做して鑑賞すべきである。仁徳天皇に奉る磐姫皇后の御作歌、聖徳太子の御作歌、額田王の御作歌等は、それぞれ悲痛事を歌ひあげようとしてゐるので、勢ひ鑑賞者は、感傷の世界へ引き込まれざるを得ない。時としてそのやうな感傷の世界といふものは、不健全な萬葉調を後世の人に移植模倣せしめた傾きもある。藤原朝以前の歌が、不健全な萬葉調を生むといふのは不穏當な云ひ方であるが、これはそれらの短歌なり、長歌そのものが不健全なのではなくてさうした感傷の世界を深く批判する能力が缺けてゐることになるのであつて、むしろ年代の下つた巻十あたりの所謂萬葉の歌らしい調子に就いてだけこれか適用し得るのではないかと思ふ。巻十の歌は、ある分り易さがあつて、一般に模倣し易い形式を

有つてゐる。僧良寛などの萬葉集から受けた影響は、訥々とした歌からではなくて萬葉集中でもやや纏りのある作品に據つたと看るべきであらう。屈託のない良寛の歌を思へば、かういふ感想も起るのである。

うち靡く春立ちぬらし吾が門の柳の末に鶯鳴きつ

梅の花咲ける岡邊に家居れば乏しくもあらず鶯の聲

冬ごもり春さり來らし足曳の山にも野にもうぐひす鳴くも

萬葉集巻十

これらの歌は、いかにも調子が完成されてゐる。現今の歌は、取扱はれてゐる題材の上には種々變化はあらうが、それを表現しようとする技法なり句法の點になると、萬葉の歌と少しも異つてゐないものを看取することができるであらう。しかし、萬葉調に馴れた人々は、一氣にかうした形式から離反しようと焦つて、散文にちかい歌の形式を求めてゐ

る。

丁抹風景

土岐善麿

ひと束の穂麥の黄ばみ少女達は素肌の腕に
ひしと抱へる
斜面にごろりとなつて眺める青麥ばたけの
むかうは海
青空、この胸のふくよかさこのうなじの白さ
に手をおきながら

これらの作品の上に考へられるものは、繪畫から享けるものに似た藝術感である。もしも、西洋畫が今日の如く日本に發達しなかつたならば、かうした種類の歌は生れて來なかつたかも知れない、といふ感じである。萬葉集を基本として出發した短歌の姿ではなささうに見える。しかし、作者自身は、純粹に短歌の領域に出入してゐると信じてゐるらしくおもはれるが、萬葉の精神が、句法の模倣に據つて發達するものでは無いと云ふ考へのもとに、意圖的にかうした表出法によつて一つの形式を生まうとしてゐるのであらう。前田夕暮氏が徹底的にかうした形式によつて別個のものを創造しようとしてゐるらしいが、前田氏の作品にしても、繪畫を豫想せしめる藝術感である。

自然の意志

前田夕暮

野は一枚の青い木皿だ、吾等を中心にして廻
轉する（ドライブ）
裸馬に乘つてアイヌの双生兒らしい若者の
顏に、明るく反射する燕麥畑
みるみる山を村落を田土を、海へ搬び去らう
とする自然の意志！

讀者の眼に極めて快く活字の有つ陰影を映寫せしめる事に成功した作品である。これは惡口ではなくて、かう云ふ感じが夕暮氏の歌から生ずるのである。夕暮氏の歌に限らず、現今の作者は、活字の有つ美しさにいい氣になり、その表現の面白さに惹かれて、內容的

に進むことを忘れがちであるかも知れぬ。内容の進歩に關心を持つやうになれば、形式は、容易に亂れるものではなくて、形式上の苦勞があつてこそ、内容の變化とともに、調子に熱を帶びてくるものである。短歌の形式が萬葉風に徹底してゆく時、そこに生ずる短歌の主體は、決して萬葉集の歌に似るものではなくて、別の意味に於ける調べがあるべきである。然るにどうしても萬葉集に引き摺られてゆくのが現代歌人の弱味であるから、そこで萬葉集を學ばうとするには、萬葉人が取扱つた題材に惚れ込むよりも、言語の移り變り、乃至微細な句法の動きを觀得すればよいのである。これは萬葉に限らず、古今集、新古今集に就いても云へるのである。ただ萬葉以後の歌風、主として、古今、新古今についていふならば、それらの短歌の形式は、一句一句の中に盛られた自然觀には鋭さが感じられるにしても、一首を貫く作者の意圖が詞のみの聯絡にとどまるかの如くに見え、或ひは自然が人爲的に詠まれてゐるために、力強いひびきを失つてゐるのである。そこで萬葉集の歌風に立ち還ることを要求されるのであつて、萬葉の歌風に還つて、古今なり、新古今の歌風を味讀すればよい。現代の短歌が必しも萬葉のみの影響ではなくて、古來のあらゆる歌

風を取入れてゐることは、ここで云ふまでもないであらう。吾々は、時として、萬葉以後、つまり、古今、新古今の歌風に愛着を感ずる時があるであらう。何か惹きつけられるものがあるのである。紀貫之の歌を左に一首抄してみよう。

朝霧のおぼつかなきに秋の田の穗に出でて
雁ぞなきわたりける

鳳雅集

これらの調子はいかにも分り易くて嫌味がない。かういふ調べも貫之の本領と看做して鑑賞すれば、無下に否定されないものがある。

ゆふされば人まつ蟲の鳴くなべにひとりあ
る身ぞおきどころなき

玉葉集

「人まつ蟲」などと懸けた詞がいかにも低級で前揭の歌と同じやうには肯定し難いのである。古今集などの歌の上に現はれてゐる句法の變化は、さきにも述べた如くに、一句一句の上には巧妙な工夫が感じられるのであるから、その句法の面白味を現代人は自己藥籠中のものとして取り入れるのがよいので、この點、齋藤茂吉氏の作品はそれらの句法の妙味

を消化してゐると思ふ。

庭　燎　　佐佐木信綱

神風の伊勢の御民と生享けて畏し今宵御火
たきまつる

神に近く仕へまもらふをぢなきや現身われ
の心處しみ

庭燎の火影さやけみ仰ぎ見れば天つ白雲し
ら木綿なせり

これらの歌は、所謂萬葉振りの歌であつて、短歌の道をこの境地に求めることには反感を抱くものはあるまい。短歌の形式はかういふ素材を活かすにもつともよき利器である。これらの歌を、古典趣味であるといつて了へばそれまでであるが、かうした種類の短歌が現代に提出されてゐるといふことは、現歌壇の爲に損失ではない。作歌上の慾を云へば、もつと苦勞された自然觀の深味があれば尚結構なのである。佐佐木氏は萬葉集を學問とし

て世にひろく紹介してゐる人であるから、作歌の上にまで苦勞が行きとどかぬところもあるかも知れない。名を擧ぐるを差控へておくが、萬葉調を徹底せしめる爲に、苦吟を重ねてゐる歌人の多くが、現代には、尚儼存してゐるが、この問題は廣汎に亙つて論ぜられる可きであつて、玆で意を盡くすことのできないのを憾みとする。

飛行吟　　北原白秋

眼下の深田に映る日の在處かがやきしるし
月のごと見ゆ

空行けば目も戀しかも山ふかく人家居して
衣干す見ゆ

深山木の黒檜の木群秀に濡れてふりしばか
りの雪斷るるなり

右は飛行機から俯瞰した自然の光景である。句法上にややまとまりは感じられて、單純化されてゐる作品であるとも云ひ得るのである。調べは所謂萬葉調であつて、飛行吟とし

て成功してゐると思ふ。ただ作者に強く要求するところは、飛行吟としての實際の深味を加ふべき點にある。現代の若い作者は、これ位の調べには成功し得る自信を持つてゐるであらう。表現上の技法にしても山上から俯瞰すると同じ程度を一歩も出てゐないである。單に詞句の上の妙味に止まつてゐる爲か、飛行吟としての重要な形式なり、内容なりを備へてゐないと思ふ。吾々は短歌本來の實行に就いては、まだまだ強い形式を要求して、内容を高めることに腐心せねばならぬ。これは、白秋氏の作を味讀して湧いた歌壇一般に對する要求の一つである。

「長城を踰ゆ」を讀む

八木沼淳雄氏の歌集「長城を踰ゆ」は純然たるアララギの歌風を以つて一貫してゐる。就中所謂茂吉調の著しい影響の目立つて感じられるのは齋藤茂吉氏の歌風に深く傾倒されてゐる作者にとつて當然であらう。滿洲事變を主題として歌はれてゐる歌が歌集全體の姿である。

奉天に事起りぬとけたたまし電話のまへに
われ立ちつくす

卷頭の歌である。いかに作者が緊張してゐたかが調べの上に窺はれる。右の一首がその時の情景をこの邊まで表現し得てゐるのは、歌といふものに心を集めてゐる者にとつては或ひは當然であるのかも知れぬ。讀者は右の歌によつて滿洲事變突發の際感動した人心の

一般的の心理狀態を受容できる。作者が歌人として眞面目に、一義的に實相に觸れてゆくことはよいことなので私は作者の歩み方を邪道でないと思ふのである。かういふことは、「長城を踰ゆ」の全體を指しても云ひ得るのではあるまいか。題材の上には種々の姿が展開されて、その事件の成行は、讀者をして息の彈むを覺えしむるのである。滿洲の野に活躍した作者の風丰は集中至るところに鮮明に看取できるので、題材が異常であるところにこの歌集の魅力がある。

今やまさに時きたれりと立ち向ふ軍のはか
らひ神のごとしも

關東軍出動

これらの歌にしても、前出の歌のやうな感動と同一の經路をゆくものであつて、表面に現れてゐる一途の作者の姿に瞠目することができる。ただ上句の抽象的であるのは歌の形を小さくしてゐるのである。「軍のはからひ」とまで云うたならば、上句にもつと流動した句法が必要となつてくるのである。一般に響く句法ではあるが、作者としての苦しみ方が不足なのである。

巡察兵の足おとひびく庭つちに迫撃砲の不
發彈痕

この歌は、題材が題材だけあつて異常な光景が調べと共に感じられてくる。かうした觀方はアララギの歌風の行き方を學んだのであつて、そこに味ひがあればあると云はれるが三句あたりの句法が固定してゐる爲に、結句の名詞止がゆとりがなくなつてゐるのである。事實は明瞭に看取できるが、聲調の不足を感じる。

露冷ゆる夜空のもとにねむるとき肌の守り
は母がたまもの

かういふ調子は一氣に浮び上つてくるものであつて、作者が卽座に手帳に認めた感動であらう。大きい題材に直面してゐる作者にとつて、やはりこれだけでは一種のもの足りなさを感ずるのであつて、荒凉たる原野に雁がねの聲をききながら母を思ふ情は、深く讀者に迫るものがあるが、「露冷ゆる夜空のもとに」では、いまだ大自然の實際に自己を沒入せしめてゐるとは云へぬのであつて、ここでもう一度作者は自己の環境を振り返つてみなけ

ればならない。そこにはもつと深い陰翳がある筈だ。

かばねを焔に焼くと霜枯れし大興の野に兵集ふ見ゆ

大自然の下に描かれた異常な人間の行動である。この歌では下句が甚だ活躍してゐる。ありふれた句法ではあるが、固有名詞の響き方がよいのである。「焔に焼くと」まで云はぬ方があるひはこの歌を強くすることになりはすまいか。餘り實際の光景に卽し過ぎてゐる爲に、この邊まで云はねば氣がすまぬと見える。右の歌は「戰友」五首一聯の中から抄出したのであるが、連作中の一首としては割合に效果を擧げてゐると思ふ。

コレラなほやまざりといふ哈爾賓におきふす友よ病むことなかれ

石をもて鋪装せる哈爾賓街上を舟ゆくけふは想ひみざりし

雨寒き街路にありて人の親が蹋り抱く幼兒を見よ

相當自由なゆとりある句法に出つて歌はれてゐる。「哈爾賓」などといふ語感に何か惹きつけるものがあるのであらう。「石をもて」云々の歌は大きい内容をもつてをり、句法としても複雜味がある。三首目の歌には、連作中の一首としてみるから分るのであるが、獨立して味ふ場合は、もつと工夫が必要であつたかも知れぬ。事實は悲痛であるが、リズムに哀調を缺いてゐる。

敵のむくろ血潮とともに凍りたりみぎりひだりに吾足もとに

畜生ぞ世にもおそましまのあたり血しほし

たたるなきがらを喰ふ

右の二首も巧みに實際を歌ひ上げてゐるのであるが、かういふ歌境に望ましい沈潛した感じが稀薄であるのを憾みとする。佛畫の地獄圖などの趣きが聯想されるのであるが、たまたま優れた地獄圖の古代畫に接したことを思うてこれらの作品に接する時、藝術として

の氣品と靜寂感が缺けてをり、表現が露骨すぎるのである。作者は相當冷靜にかうした事實を觀照しようとしてゐるらしいが、巧さによつて生かし得る技法に馴れてゐない。

村人ら幾山こえてのがれゐむ犬もぞ痩せて
おびえつつ吼ゆ

右の一首は、「寒天」十六首中の作であつて、これ以外に調子の高い佳い歌があるやうだが、さし當りこの作の底に流れてゐる悲劇を看出すに好個の例歌と思うて批評することにした。この一首にしても、先づ戰爭といふ觀念をもつて味はなくてはならぬのであつて、戰爭が突發して、砲火の中に怯える村落の風物である。村人らが戰爭の爲に幾山を越えて避難する、それも食に飢えながらの人々が多い、犬さへ痩せて怯えて吼える聲が聞えるといふのであるが、事實は歌はれてゐるもの以上の悲慘な狀態なのであらう。作者は表面的にはかうした大きな事件を歌ひ上げてゐるつもりであらうが、やはり短歌の形式に囚はれてゐるのが目に立つのである。かういふ歌はもつとこの一首だけの上に戰爭の感じを現はすことに苦心を要すべきであつて、「犬もぞ痩せて」あたりにやや言ひ過ぎる感があるのかも知れぬ。

城壁は山とりかくみ溪を跨え河にそひつつ
消えてかつ見ゆ

この歌はかなり句法がごたついてゐるやうであつて、調べがさわがしいけれども實際に卽いて歌はうとしてゐる作者の意圖が強い爲に、何か動かし難い品格を備へてゐる。集中に挿入されてゐる寫眞は、いづこであるかは指定してゐないが、無言の裡に大きい自然の相を語つてゐるのであつて、この歌は、それらの寫眞を觀てゐるやうな感じがする。作者は眼に沁み入る程かういふ大自然に接してゐたのであるから、その寫生がおのづから歌となつて生まれたのであらう。

水羽吹き目のもとに立つ鴨どりは遠くは行
かずまたかへり來む

この歌も前の歌と同じく、「熱河離宮」一連中の作であつて、心憎いほどよい境地を歌ひ上げてゐる。一寸した旅の風景ではなくて、作者の足が滿洲の地に深く付いてゐる趣があ

る。「熱河府城吟」の中の一首

とりよろふ四方の山並北向きは寒々として
雪つめる見ゆ

句法は別に新らしいといふのではないが　茂吉調の影響を素直に取り入れてゐるのがよいのであつて、「北向きは」あたりの句法は、作者の觀察がこれで落ち付いたといふ感じである。かういふ境地は早速に作れさうな氣もするのであるが、技巧がこの作者ほど熟達してくると、かくの如き表現ではもどかしさを感ずるのであつて、勢ひ句法が飛躍する。この作者にそれがないのは、非常によいことなのである。「長城を踰ゆ」一卷が作者のこれからの發展の上の基點となつて歌道に精進するところがあつたならば可成り大きい收穫であらうと思ふ。

「馬夫かへる」などの一連は情味の濃い作品であつて、その詞書にさへ一抹の哀愁を覺える。

興安嶺のなだりの山をこえて來て左にこご

し陰山山脈

飛行吟である。やはり固有名詞の響きがよいので、歌調に甚だ面白味が感ぜられる。さて飛行吟などについて注文したいことなのであるが、多くの作者は、眼下がいかなる狀態であるかに主として關心の重心があつて、機上にある作者自身の動搖が窺はれぬ。むしろ機上の事などの微細なところに目をつけてみたならば異常な觀察も下せるのではあるまいかと思ふ。

南天門兩側の敵いちはやく新開嶺の稜線を
這ふ
北京街道を群なし逃ぐる敵軍を追ひ擊つ距
離は七千三百
飛行機のここぞと示す空のもと猛火は注ぐ
裂けむばかりに

實景に卽かうとしてゐるゆゑか、調べがやや表面的であるのは止むを得ない。これらの

歌は、當然のことを當然に果してゐるといふ感じであつて、作者にとつては、短歌の題材として異常なものであるといふ確信はあると思はれるが、一向の心が、掩ふべきものを掩うてゐないといふ感じがないでもない。かういふ歌を作られたのは歌境の爲によい示唆ともなるのであるが、作者が歌人として生くる場合に、深く考へねばならぬ重要な問題がこれらの歌の中に藏されてゐる事を識るべきである。

抵抗ひし敵陣にいま音もなし山襞ふかく立
つはかすみか

「山襞ふかく立つはかすみか」はいい句である。かういふ歌になると靜かに迫りくるものがある。作者はかういふ心の配り方を深く味ふべきであらう。上句にはいまだ問題はあらう。「抵抗ひし」あたりの句法に弱さがありはしまいか。「烈風を衝く」一連は、飛行吟として會心の作なのであらう。

日を一日砂捲きあふり千五百米の機上にあ
りてなほ砂をあぶ

ゆり上りかつゆり下しかたときも機動はや
まずこごし山脈
地上だに日をあけがたき烈風をわがプスモ
スは山嶺をこゆ

いかにしたら自己の感動を他に愬へられるであらうかといふ配慮と、短歌の形式の上にどれだけ自己の感動を表白し得るかといふ焦燥の二點に立つ作であらう。「日を一日」の歌は、成功した作品であらう。後の二首にしても可成り單純化された句法が目に立つのである。作者が烈風を衝いて飛んでゆく飛行機上にあつて、鞄に入れてある三百十八首の歌稿のことを考へてゐるなどは、この作者の面目を遺憾なく傳へてゐると思ふ。掩中の航空場とか、口中の砂を噛いて綏中に一夜寢るなどと歌はれてゐる歌は、なかなか得難い歌境である。

たたかひし砲のけむりか北山に夕ゐる雲は
飽かずおもほゆ

茜ぐもうすれたゆたひいづくにか幼童の泣
くこゑきこゆ
地の底ゆもり立つごとき炸彈のひびきは重
し敵が據るやま
香椿の新葉をひでて食ひにしも吾とこしへ
に忘れざるべし
照りつづき白河の瀬の音ほそる日はこの國
原をわれらあへぎつ
霞うつ音に目ざめてくだつ夜を段折れ光る
いなづまを見き
山原に雲横はり高やまの群秀はうかぶ天の
眞青に
しんじゆの小花むれさく城壁をいまかけ下

る黒き仔豚は

他に佳い作がいくつもあらうかと思ふが、漫然とこれだけの歌を抄出してみた。動きのとれてゐる作品であつて、これと云うて難を云ふべきところもない。作者の一貫した作歌態度に固定するところがなくて、かういふ歌境の展けたのはよい事なのである。滿洲事變が歌人としての作者の力量を大ならしめたのである。作者は、アララギの歌風の影響を素直に受容して自己の天分を養ひ得てゐる。それを幸せとせねばならぬ。

（昭和十年二月二十二日）

子規の歌論

子規の歌論が明治大正の歌壇の根幹となつて今日に及んでゐることは、誰人も否定し得られぬ事實である。短歌をこれから學ぶ人にとつて、短歌が如何なるものであるかを論ずる人にとつて、子規の歌論が一つの源流であるかの如くに思はれ、子規の歌論から出發することによつて、短歌論は展開するかのやうである。子規を學ばずして今日の歌壇は論ぜられぬと云うても過言でなく、あらゆる問題が子規の歌論の中に藏されてゐるのである。現在では子規時代よりも、歌を中心として學ばうとする人々が多くなつてきてゐる故に、歌論が綿密になつて歌を論ずる語彙もなかなか豐富に使用されてゐて、むしろ諄すぎるところまできてゐる。かういふ時代にあつて、再び子規の歌論を振り返つてみるとき、子規が如何に簡明率直にものを云うてゐたかが偲ばれるので、縱令、組織だつた歌論でなくて、

素材的であらうとも、歌の實際の上に立つて意見を述べてゐるのであるから、大言壯語しても嫌味に響いて來ないのが特長である。俳句から短歌の道に悟入したとはいへ、子規には短歌のリズムを先天的に把握してゐたところがあつて、初期の古今調らしい作品の上にも、何かのひらめきが感じられてくるのである。子規は左千夫ではないが、いかにも歌の神であつたとも云へるのである。年齡四十に滿たず死んでいつた獨身生活者である彼の藝術は、或時にあつては誰人の追從をもゆるさぬ大きなひらめきがあり、そこから後進の學ばざるを得ない道をも開拓してゐるのである。短歌革新の意見が歌壇に火花を散らしたとき、その當時の多くの人々は、子規のさうした言說を實際に驚異の眼を瞠ることもなくて過ぎたのであつて、むしろその說を奇人の奇語として漫罵したのであらう。子規の歌論が筆端火を吐くやうに辛辣であつたのに、彼の短歌は靜かに平淡になつていつた。病苦に基因するところもあらうが、彼の思想が內面的になり、三十一文字の微細な變動を、おのづから自己の裡に感ずるやうになつて、三十一文字の形式の上に、彼自身としての積極的な運動が開始されたとみるべきであつて、毫も消極的に移行したのではない。「歌よみに與ふる書」

を發表した明治三十一年當時の子規の短歌を見るならば

世の人は四國猿とぞ笑ふなる四國の猿の子
猿ぞわれは　「われは八首」

ひんがしの京の丑寅松茂る上野の陰に晝寐
すわれは

いにしへの故里人のゑがきにし墨繪の竹に
向ひ坐すわれは

人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵に籠りて蠅
殺すわれは

富士を踏みて歸りし人の物語聞きつつ細き
足さするわれは

吉原の太皷聞えて更くる夜にひとり俳句を
分類すわれは

昔せし童遊びをなつかしみこより花火に餘
念無しわれは

果物の核を小庭に蒔き置きて花咲き實のる
年待つわれは

かういふ歌を平然として作つてゐる。題材と句法上の變化にはいま考へればやや物足りない感がないでもないが、これらの歌の聲調の上に見逃してはならぬものがある。子規が短歌の世界に籠めた精神には、いふまでもなく積極的な要素が深く根柢をなしてゐたのであつて、彼の藝術に働きかけた後世の人々の運動乃至實際化は、ここに重要な役目を果さざるを得なかつた所產なのである。

小泉苳三氏著「根岸短歌會の位相」中の「根岸短歌會の短歌觀」の一項に、「彼は文藝の上に流動を求めながら、人生を社會を、流動の姿に於て觀照し把握しようとはしなかつたのである。從つて彼の寫實精神は古代的な自然美觀と封建的な人情論に限定せられ、そ

の世界觀は固定的なものとなつて行かざるを得なかつた。」と述べてある。右のやうな子規に對する小泉氏の見解には、歌を作る一人として私には不滿がある。子規は、現歌壇に行はれてゐるやうな題材は取扱つてゐないにしても、當時に於ける人生なり社會なりに對しては、子規一流の立派な觀察を下し、それを把握して實際の上に移してゐるのである。「人生を社會を、流動の姿に於て觀照し把握しようとはしなかつたのである」云々は、一體どういふ意味なのか、啄木の例を擧げて云ふならば、子規には啄木の作品の上に觀られるやうな、社會相を歌はなかつたとでも云ふのか、單にこれだけの問題を取り上げて小泉氏が子規を批判してゐたとしたならば、小泉氏には子規の短歌の味ひが分らぬのである。子規に就いてかういふことは云へるであらう。子規は、人生の機微、社會の機微を深く會得した人であつて、限定された短歌形式の中に自己を沒入せしめて、廣大無邊の世界を現出せしめた。「瓶に挿す藤の花房短かければ疊の上にとどかざりけり」の一首は、小泉氏の所謂「古代的な自然美觀」に限定せられた自然觀照ではない。かう云へるのである。子規曰く、「宗武は萬葉を學びて其骨髓を得たる者、其歌多くは萬葉調なり。されど萬葉を固

守して其範圍を脫する能はざりしが如き無能者にはあらず。其歌に三句切の多き、てには止の多き等皆萬葉以外に得たる所なり。」云々。以上の子規の言說をもつと廣く考へたならば、今日に於ける小泉氏の見解に對する反駁ともなつてゐるのである。小泉氏は又「封建的な人情論」云々と述べてゐるが、子規のある時の、ユーモアを湛へた文章を讀むとき、そこに流れてゐる人生觀なり、人情の經緯は決して限定されたものではなくて、讀者をして視野を拓かさずにはゐられぬ内容を藏してゐる。固定的な世界觀ではない。

「アララギ故人歌集第一」評

「アララギ故人歌集第一」を通讀して先づ感じられるのは、素朴純直の歌風で一貫してゐて寸毫も浮薄な作品がなく、主觀を力強く高揚してゐる點である。作品からおのづからそれらの人々の環境が鮮明に讀者に迫つてくるのである。正岡子規の歌人としての生活を、力強く神を崇めるが如くに高揚して止まなかつた伊藤左千夫の言說は、地方に於ける若い歌人の神經を昂らせずにはゐなかつたのであらう。アララギが今日の歌風の基礎をなすものは、右のやうな先達の信仰にちかい作歌慾に燃えてゐたといふことに起因するのであつて、感慨深いものがある。而してその作風が萬葉調であつて、古語を驅使する苦吟の跡歴然たるものさへ感ぜられる。いまだ句法の點に至ると、萬葉の歌を消化しつくしてゐるとは云へないが、どこまでも萬葉を信じて疑はない心、子規の精神を承繼がうとする心、元

氣いつぱいの作歌力、これらがこの先人達の作品を裏付けてゐるのである。いま新たな心となつて、篠原志都兒、望月光、堀内卓、湯本喬山四氏の作品に接してみるに、ここまで萬葉の調べが行きとどくといふことは容易でない氣がした。湯本喬山集を除いて他の人々の作品は、大方二十代の體驗から生み出されたものであり、その技法が一種の模倣にちかい趣を感ぜしむるところがないでもないが、相當優れた手腕をもつて一氣呵成に作歌してゐる。篠原志都兒は、三十八歳で死去してをり、その作品は他の三氏よりも熟達の域に達してゐる感がある。先づ篠原志都兒の歌から意見を述べてみよう。

かげろひの夕てりかへす立科を見つつ萩刈る吾は幸あり

おくで田の夜刈のころゆ立科の尾の上はだらに雪降れるみゆ

かげろひの斜夕照る丘のべに桑摘むらしも唄の聲する

桑つむと人皆出でし家の內にただ獨り居り
聞くほととぎす

右のやうな作品が秀作と云ふのではないが、どこかにこれらの作品の裏に潜む自然美に伴ふ素朴感を味ふことが出來るのである。神經が苛々してゐなくて、自ら作歌を樂しむ風が見える。すなはち歌柄がこせこせしてをらず、病的でなくて健康であるところに志都兒の特色がある。短歌はかういふ風に發達してゆくべきではなからうか。都會生活者でなかつた作者にとつては、かういふ道を踏むのが當然すぎる程當然であつた。多種多様の技巧の變化と、題材の異色を好む人々は、信濃の歌人篠原志都兒の作品に飽き足らなさを感ずるであらうが、一度短歌の上に人生の重要性を感ぜずにはゐられぬ時にあつては、先づ篠原志都兒の歌の如きものが念頭に置かるるのが自然ではあるまいか。ここから發足する道は、細く狹くとも、永劫につづく短歌本來のものである。現在のアララギの讀者は、子規、左千夫の言說なり、作歌に據つて自己の製作行動に、いやが上に油を注がれた地方に於けるこの若い歌人の姿を凝視すべきである。中央歌壇の影響を素直に受容する人々は、

中央の人ではなくて、むしろ、地方に多く發見されるからである。

網膜炎を煩ひ視力減衰す

病みこもり一朝見れば十年へて相見るがごと物なつかしき

思ふこと更にもならずいたづらに庵こもり居り日數へにけり

とこ永久(とは)にめしひならばと垂乳根はしが日の如く悲しみませり

志都兒は、十八九歲で妻を迎へて、間もなくその最愛の妻を失つてゐる人である。この一事を念頭に浮べて志都兒の作品を鑑賞する時、宜なる哉、作品の上に感ぜられる自然觀には、人を惹き付けて飽かしめぬ調子がある。味へば味ふ程歌に據つて知られる人間味である。右の三首が、たとへ初期の作品であらうとも、多くの希望を持つ若い作者にして、これ程素直にかうした題材を生かし得るといふことは、天分と云へようが、毫も末梢神經

を咬るところがない。作者は元氣にまかせて八ヶ嶽などに幾回となく登攀して秀作を遺してゐる。高山などの作品は、子規、左千夫には見受けられないのであつて、かういふ點から考へてみて、志都兒の高山詠は、當時の歌壇に對つて先鞭をつけてゐる觀がある。この一事だけでも此作者に對つて敬意を表すべきであらう。

火の神の昔すさびしいただきは松も生ひせず砂原にして

這松をさはにし焚けば久方の天つみ風に山鳴り渡る

ここにして富士が根見えず見さくれば いかし八ヶ根さ霧迷へり

詞句の運用方法がいまだ幼稚であることは免れまいが、山嶽詠として參考するに足りる。山嶽に對する現實感が、やはりこせこせとしてをらず、健康な山嶽詠である。つまり歌壇的の意識が加はらずに純直な心から山容に接しようとするところから發足してゐるのでよいのである。

くれ竹の根岸の靈と殘りたる竹の里歌吾が命なり

かういふ心持の据ゑ方がよかつたのである。これはやはり左千夫の言說の賜ものである。歌としては常套の域を脫してゐないが、作者の一面を語り得る作品である。「足病みてよめる」歌の一連なども哀傷深きものがある。

馬曳きて出で行く父がうしろ影見つつしもとな病める我足

代田踏みこのせはしきを思はずして籠らるべしや足病めりとも

君が來しをただにうれしく吾が足の病めるも知らに四里を歩めり

いかにも自然で素朴な表現である。農民生活者などといふ意識を加へずに、ありのまま

の實際に卽して歌ひ上げてゐるところは敬服に價する。病牀生活の子規を深く畏敬して止まなかつた作者は、題材の上には子規などの作歌の影響はあつたであらうが、實際の作歌行動に至れば、子規の歌よりも無邪氣にありのままの生活狀態を歌ひ上げてゐる。「柿車」の一連などは好箇の逸品であつて、詞書たるや又名文である。柿乃村人が、志都兒に柿を送るべく車に柿を積んで遊びに來る光景である。「師走の五日の事なり、柿君柿を車に積んで遊びに來るよし告げこしぬ。流石はどこまでも柿乃村人なり。」云々の文章など作者の風丰が躍如としてゐる。

眞直路のすぐ路の果てに君が影ほのに見え
くる柿が見えくる
家に入るその柿車父も母も木戸にし出でて
迎へよろこぶ
たまはりし柿の返禮と北山の茨炭のせて車
かへせり

何んと云ふ素朴な歌であらう。集中から云ふ作品をみいだすといふ事は、實に愉快極まると云ひ得る。この他佳作が幾つかあるが、いま集中の最後の「藁にほ」の一連を抄出してこの項を終へようと思ふ。

この朝子等にせがまれ畏すると冬田のくろ
の雪掻きにけり
藁鳰に隣りてかけし鳥罠に今朝霜深く鳥も
見えなく
わらは等がいさかひおほみ泣き笑ひ聲いさ
ましく家鳴り賑ふ
あそびすぎし晝の疲れと宵早く三人の子ら
は寢るをせがめり
庭に干す氷餅に日毎くる鶏らうるさく追へ
ども又來る

雪月夜鋭く晴れて音もなしさむざむと夜は
更けにけるかも
風交り雪は日毎にあれ寒き新春（にひはる）とこそなり
にけるかも

健康的の作品であつて、調べが浮はつかずに一つのものを凝視した相である。人生の寂寞感を歌ひ上げてゐるのであるが、詞の表面に騒がしからず内に籠ると云ふ觀がある。

故人歌集の作者の年齢を考へてみると、望月光、堀内卓の二人が二十代で生涯を終つてゐるのであるが、各自歌の環境に自己を沒する程に作歌に苦勞してゐたといふことは、晩年の幾つかの作品を鑑賞する事に據つて益々その感が深い。休み休みの作歌態度では晩年に於ける優秀な作品は生れて來ないと思ふ。堀内卓を失つた若年の望月光は、

君一人とこよにやりてこの秋はわれに友な
き思ひするかも

などと歌つては自ら慰めるところがあつたが、慰め難い心は、幾たびとなく卓を悲しむ

歌を發表してゐる。「八たび卓君を悲しむ」の一連は、いかにも哀傷が深い。作歌上の交流が、人一倍友情を深めてゐるのは羨ましい限りである。「潮泡日記」の一連にしても、なかなかの才氣さへ感ぜしめるところがあり、作歌態度の上に、寸毫も苛立しさが窺へないで、そこが歌の調べを伸やかにしてゐるのである。

明治辛亥中四卽吟四首以代物作之文字

畑つもののたものくだものいやとよにみのら
む秋をかねてみまくも
あしはらの國つ寶と桑子（くはこ）養（か）ふ繭さはなれも
ほかひすましに
弟らよ汝（な）らがゆく手にくさぐさの花は咲き
たり採るにまかせむ
目をあけて見るや遠べに立つ山にあよみ近
づく事をしぞ思ふ

二十代の作者とは思へぬ技巧の洗錬されてゐる佳品である。古歌の相を深く味得して自己のものとしたその技巧の冴えと、それが寸毫も借物でない自己の本然の姿が、くつきりと眼に映ずるといふ作品である。「目をあけて」云々の歌などは、もつとも獨自な歌境を拓いてゐると思ふ。かういふ歌にこそ吾等は學ぶべきものを持つていいのである。今の若い人々はよろしく望月光の晩年の歌柄に驚異の眼をみはるべきである。

雲岫歌

うつそみの物とも知らにあやしくもま空の
響我(とよみ)をつつめり
立ちそそる天の岩秀の峡(かひ)過ぎて見おろす谷
は雲もつれたり
湧きあがる雲のにほひに包まえて常世の空
に消(け)なば消(け)ぬべみ
かへり見る來し方ぐもの白雲は二(ふた)分れたり

吾が別けしかも
世の中の現しささかりある吾をあやしきこ
ととおのが胸見る

右の一連も非常に技巧が洗錬されてゐる。むしろ老熟とさへ思へるのである。自然觀なり、人生觀が左千夫流のところがあつて、それでゐて少しも自己の力を失はずに本質的のものを具現してゐる。若き作者に、遠大な抱負のあつたことが先づ偲ばれる。

堀内卓の作品に至ると、やや青年流の匂がする。これは作者が若いのであるからどうとも仕方がないが、又そこにこの作者の瑞々しさが認められるのである。

庭前囑目

裏庭の桑の畑の片すみに菊むら枯れて春の
雨ふる
朝の間に春の雨はれ畑に植うる苗木の橘葉
の面(も)光れり

多枯れし鋸草の苅りあとを土やはらかく新
芽もやせり

今の若い作歌者達は、かういふ眞面目な自然觀には、一種のもの足りなさを感ずるであらうが、短歌を學ばうとする人々にとつては、これらの作品の上に、短歌として無くてはならぬものの命が籠つてゐることを先づ感じなければならぬ。「岐蘇行」の一連を引用してみよう。

山の間にひくき河原の河柳に狹霧はしづむ
小雨つつみて
あし引の山間の谷に雨なごみ河原木がくり
さ霧みだるる
ま木しげる木曾山かげのまほらにし濃みど
りの淵澄へたる見ゆ
白泡を底まき返しゆらぐふち見るにたへず

も足はすくみて
駒が根の風越山に雲みだれ河瀨さかおつま
とも山根に
山の根のま木生ひつつむまほらべにさかお
とす瀨の風耳になる
木曾川の河原河柳吹き返し谷裏たかき雲み
だるみゆ
岐蘇川の河原見下し見上ぐるや圖土破れ處
に立つ思ひかも

誰人の模倣でもない新しい自然觀である。一見して平凡な觀方のやうであるが、微細な神經の活動が見える。衒氣でない作歌態度と、こせこせしてをらぬ獨自の自然觀照である。讀者は深く敬意をはらつてこれらの作品の句法の巧みに瞠目すべきであらう。ここに至ればすでに青年流の域を脫して歌人としての面目を永久に傳へてゐると思ふ。再びいふ。句

法の妙味に注目すべきである。

湯本禿山は年長者であつて、妻子も在つて極めて健全な生涯を送つてゐるやうである。しかし、子供の逝去に逢つた一事は、この作者にとつて一大痛恨事である。それに、禿山の周圍からは、故人歌集の環境によつて考察してみるならば、志都兒、卓、光、の若い歌人は相繼いで死んでゐるのであつて、故人歌集を通讀する上において、いかにも哀傷が深い。左千夫先生を悼む歌すら存在するといふことは、一入湯本禿山の周圍を寂寥たらしめてゐる。しかし、幸ひにして彼に柿乃村人といふ歌人が存在してゐたといふ事は彼をして行くべきところまで行かしめた感じである。非常に元氣な丈夫振りの歌を作つてゐたらしいと思つてその作品をたどつてゆくと、案外感傷味のある作品に接する。

悼左千夫先生

われにただ年の一つを越えし君一言告らで
ただ逝きにけり
百千人友ありながらなにしかも一言のらで

ゆきにけむ君
瑞玉の玉のゆらぎの音さやに君がおもかげ
まなかひにあり

かうした歌柄の中に、禿山獨自の道がひらけてはゐないのではあるが、心のゆらぎ方に眞實味がある。「神草」の一連は作者の風格を遺憾なく發揮してゐる。

仙人の採りて命をのべにけむ奇しきくすり
も交らむと思ふ
群山の神のこぞりてことはかる筵の石とし
ける此の岩

詞書が面白い故引用しておく。「高山植物を移し植うべく信濃らの高つ嶺のさまに石山を築きて」かくの如き種類の歌は歌材としても珍重すべきものであつて、いかにも山國人らしい感慨である。短歌がかういふ世界を求めて遊べるのであつたならば、先づ限りない悦びである。

冬ざれ

晩稻(おしね)田はかりをへなくにこの朝明時じく雪
の降り積みにけり
物みなはえ堪へず枯るる雪の中に青羊歯(あをしだ)の
葉のつづく堤かも
面(おも)うつあさ風さむみいきつまる野路をわ子
となげかひにけり
丘の邊のこれのさ庭に家こぞり初日をろが
むすこやかにして
にひ年のあした子らを率(ゐ)てふみよみ
そめぬ小雨しづけし

いかにも老熟した技法である。短歌を永く愛し續けた人の作品であるといふ感じがする。平凡のやうでゐてなかなか巧みな味を出してゐる。萬葉調が、ここまで自然に現代人

の心にしつくりしてくるのは容易でないのである。晩年の歌にはやはり優れた歌が發表されてゐるやうであるが、讀者はよろしく各自の鑑賞程度に據つて抄出して味ふべきであらう。以上故人歌集に就いての私の片言は、意を盡くさないところが多くあるであらうからいづれ心の落つきを得てから再び感想を述べてみたいと思ふ。何んと云うても晩年になる程歌が高められて容易に到り得られぬ境地まで押し進められてゐるのであるから、これらの作品は、現代の短歌の水準を下らないと云ふ事を強いて述べておく次第である。

右故人歌集についていささか注文したいことは、各々の作者の年譜が必要でなかつたか。比牟呂、アララギ等を持つてゐる人は、作品の下に附してある數字によつて年月日を推量できるが、無い人にとつては、年譜によつて早速に分るやうにしておいた方がよくはあるまいか。それから故人の小照がぜひ掲げられてあるといい。

紫塵集評

紫塵集の歌品をいふならば艶消と云ふ感じであらう。先づ詞の驅使が巧みで俗調に墜ちず品格を備へてゐる。なかなか堂に入つた技法をもつて一首を構成してゐる。念には念を入れてあつて詞の上の破綻を見せてゐない。題材はありふれた日常矚目の事柄を取扱つてゐながら、どこかに手馴れた才氣で押包んでゐる。或ひは閃めきといふものが影を潜めてゐるやうであるが、詞句の運用に重々しく響くところがある。此の歌集から傑作を探し求めるのは一寸困難であらうが、佳作となると幾つも求め得られるといふ感じである。どれもこれも滑らかにおつとりしてゐる。作者の紫塵集以前の歌を知つてゐる私にとつては、此の歌集が形式の上に於いても、内容に於いても、大變化を生じてゐるところに瞠目するのである。作者の過去の歌柄といふものは、かなり技巧的であつて、調子が實に巧みであつた。作者の友達である松倉米吉の歌のぎごちなさと、此の作者の技巧的な滑らかな歌は、常に第三者の問題となつたのであつて、作者にしても常にその滑らかさから脱却しようとした時もあつた。あるひはその滑らかさに得意であつた時もあつたらしい。このやうな過去の一切の作品を棄てて、紫塵集の内容を高めようとする大きい努力は、作者が歌集發行の時期なり、今日の歌壇の趨勢を深く洞察し得た鑑賞眼に歸する。ここで紫塵集以前の歌を非現實的のものであるとか、技巧的のものであるとか云ふのではなくて、むしろ作者の實生活の反映の著しいのは、過去の作品に多いといふ感じである。現在の作者の短歌が、より深く高められれば、高められる程過去の作品が意義づけられてくるのである。これは一種の德である。上句は忘れたが、過去の作者の歌に、かういふ作がある。「さりげなく猫と戯れて歸る」この歌は、金を借りに行つてその相談を持ちかけることが出來ず、躊躇して歸つてくるといふ歌で、當時土岐哀果選の文章世界の一等に選出された歌である。この調子は、石川啄木流の短歌の持味を、露骨な技法を用ゐずに、一方アララギの萬葉調に目をつけてゐた時代であるから、此の兩方の短歌の持味をうまく折衷した作品であつたの

だ。「霧立ちのぼる秋の夕ぐれ」と云ふ句法をそのまま踏襲していい氣になつてゐた時代も作者にはあつたのであるから、これらを思ひ紫廛集を手にする時、いかに作者が短歌の本質に對つて精進してきたかが思はれてくるのである。

紫廛集は稀に見る嚴選された歌集である。一首一首について心ゆくまで作者の反省と、詞句の改竄がほどこされてゐる。大きい波の起伏はないが、一首の上に盛られた作者の感じには相當大きい波が打つてゐるであらう。後半に至つての題材の上には歌壇的の影響は見受けられると思ふ。

そこで後半の歌について言ふならば、土屋文明氏あたりの影響と、竹尾忠吉氏あたりの影響があるのではあるまいか。

食卓に食器かちあひ氣ぜはしき街の食堂に
夕べもの食ふ

それぞれに人は樂しめ我が妻にカリーといふもの一度食はしめむ

銀座をばしばし行きてまたたち戻りぬうま
きものはやはり廉くあがらじ

外型には文明調のやうなところもあるが、感じてゐるものに、かなりの相違がある。これは根本の問題であつて、文明氏の歌には歌壇的の意識が強いと云ふことになるのである。「小名木川勝智院」の二首は、作者の歌として珍らしく寂寥感を湛へてゐる。

いそがはしき日の暮に來て工場地の古きお
寺に墓をさがせり

工場のもの音ひびく墓地を行きさがしあて
たる墓はまづしき

作者は自然に直面して強い感動を受けない風に見える。早速に響きあふものを求めようとはしないやうである。むしろ冷酷に自然を凝視して、然して後徐ろに句法上の工夫に力を盡すのである。それでゐてその力が表面化して來ずに、表出されたものはやはり冷靜な作品である。

遠國の山にいただく雪を見てふたたび家の
陰を歩めり

かういふ特殊な歌もある。「ふたたび」といふのがやや獨りぎめである。やはりかういふ境地は都會生活者の目をつけるところであつて、いかにも郊外の歌といふ感じである。

あかときの光は比良の峰にさし近江の湖の
春あさきころ

此の歌は「關西山陰に旅す」中の一首である。觀方には別に新しさはないのであるが、落ちついた調べがある。かういふところは作者の本領ではないやうだが、かうした種類の歌にももつと徹底されたものを要求するのである。總じて紫廛集の歌には、徹底的に歌ひ上げようとする努力が缺けてゐはしまいか。これは作者の性格からきてゐる問題であつてづぼらのやうであつてどこか神經の細かい點が、何に起因してゐるかと云ふと、詞使ひに細心な注意をしてゐるからでもあり臆病にもなつてゐるからでもある。國文法などに深い理解を抱く作者にとつては、表現が無造作にならうとしてもなりきれないのであらう。む

しろ詞使ひの無造作な初心者が、生一本な徹底的な歌を作るものである。この邊の關係を作者は考慮に入れてゐてもよいであらう。作者はとつくに如是の問題は悟られてゐるかも知れぬが、苦言を呈する次第である。

植ゑこみしその夜に春の雪降りて露しとど
なる胡頽子の花かも

雪の上にこまごま散れる胡頽子のつまさき
赤き花あはれなり

胡頽子の花はしみみに咲けど淺みどり若葉
のなかに目にたたぬかな

このやうな自然詠もある。幾分句法が細かくて、修飾すぎる嫌ひはあるであらう。ただ推敲を重ねられたあとが見受けられるので、調子からは輕薄でない感銘をうける。しかしまだ短歌としての本質的のものは出切つてゐない。もつと單純化されて句法が冴えて來ねばならぬ。

吾人は短歌の上に於ける連作趣味といふことに馴れてゐる爲に、歌集を手にする時、連作を内容の上に求めようとする氣分があつて、そこに種々の親しみさへ覺えるのである。しかるに紫塵集の内容には、連作的の作品があまりに尠ないために、何か物足りない感がある。作者は一首の獨立性を深く考へて、そこに力をそそいでゐるやうであるが、一首獨立しての強さが表出されてゐない爲に、それらの歌の上から強い感動をうけない場合が往々ある。かういふ時に、そこに續く幾つかの連作の歌があつたとしたならば、一首づつの内容に妙味が偲ばれるのではあるまいか。それだけこの歌集は面白味の點から考へると損と云ふ氣がするのである。この弊害はあまりの嚴選にある。たどたどしい歌もあつていい譯である。但し、詞の吟味を深くする作者にとつては、一首の上に力強い作風を求めようとしてゐるらしいから、連作趣味の觀念に囚はれなくともよいのである。作者は古語の妙味を解して、うまく利用しようとしてゐるが、かへつて通俗化してくるものもある故、この邊にも作者は留意す可きであらう。雜誌に發表された歌には、可成り我儘な作品もあるやうに思へたが、此の歌集にはそのやうな作品は多く採錄されてゐない樣に思はれる。或

ひは推敲改竄の結果、歌柄が違つてきてゐるのかも知れない。

後半の作品は、短歌として自由領域に出入してゐるのであるから、ここをうんと徹底的に歌ひ上ぐる必要がある。

歌壇の情勢

歌壇の情勢を識るによい機關である綜合雜誌の出現は、短歌の民衆化に對して相當の功績をあげてゐると思ふ。現代の短歌の發展した相を辿つてみれば、何んと云うても結社の中から生れた個人の力であり、それらの人々の力にしても、その結社が世間的に有名になるに從つて認められたのであるが、その背景をなすものは團體の力であつた。いまや短歌の同人雜誌が地方的に簇出して旺盛を極めてゐると同時に、綜合雜誌も亦よく同人雜誌の呼吸を會得し、その内容を充實せしめようと勤めてゐるやうだ。歌壇に於ける短歌新聞の存在にしても、歌の世間に順應してなかなかの發展振りを示してゐる。如是の歌壇觀は甚だ皮相的の觀方であるかも知れぬが、現歌壇の情勢を一瞥するには、綜合雜誌の存在と、短歌新聞等の存在を無視するわけにはゆかぬ狀態となつてきてゐる。一方會員組織の同人

雜誌が、尙、儼として歌壇の大勢を掌握してゐる態度は、未だ綜合雜誌に原動力を奪はれまいとしてゐるもののやうに見える。だがかくの如き歌壇の情勢を批判する用意は、今の歌壇人は多分に持ち合せてゐるのであつて、双方に利用する巧妙さが窺はれるのである。いまや歌壇は社會的の運動を開始しようとする時であるらしいが、これは各自が意識してゆかうとするものではなくて、つまり歌壇を意識せざるを得なくなつて來てゐる時ではあるまいか。

プロレタリアの短歌運動なるものがその印象を歌壇から引込めて了つてゐるが、かつてのかうした運動は、歌壇の一面に對つて一つの變動を與へてゐるのである。歌壇人は知らぬ間に影響されてゐるのである。ただ歌壇人として苦勞を積んでゐる人々は、そのやうな運動の直接の影響を受けようとはせずに、むしろ題材の變化の種として老練な技法を以つて掩ひ包んでゐる風が見える。一方それ等の運動を無關心の如くに裝うて花鳥風月吟に親まうとする人々は、技法上の苦心に沒頭すると云ふよりも、永い時間をかけて癒らされた、自然觀照に狎れようとする作歌態度を避けて、自己を中心として觀照しようとする立

場に置かれてゐるかのやうである。

これらの人々の動き方にしても現歌壇が自然に持つた意識といふものに一つの批判的の心がある爲に、例へ花鳥風月吟に滿足してゐるやうであつてもどこかに歌壇に對する運動を開始してゐるのである。變動を求めてゐるのである。

題材の取扱ひ方にしても、いまはあらゆる方面に觀照の眼は張られてゐるやうだ。何物でも歌にならざるものはないといふ傾向がある爲に、三十一文字の形式の上に躍動しようとする作歌態度は、實に千變萬化であつて、目まぐるしい程凡ゆる對象を追求してゐるやうだ。それでゐて捨身でない技巧本位な飛躍的な技法に、浮身を窶してゐるのであつて、神經の苛立たしさは看取できるが、實際のものが表出されて來ないのである。しかしかういふ事が云ひ得るであらう、例へ拙劣な作品でも、それらの作品の上に流れてゐるものに同感する人がどこかにをりはしまいか。例へば、醉うて歌ふ俗謠の一つが、感傷的に聞えるやうに、ごもつともに聞えるやうに。題材の選擇に自由奔放であるかの如くおもふ現歌壇人は、ごもつともに聞えてくる耳を塞いで、しばらく響きくる音の高低に心をあつめて、

その息の彈みを傾聽すべきであらう。

民衆化しつつある短歌の相は、いまや社會的の刺戟が必要となつた。必要とせざるを得なくなつたのが現歌壇の情勢である。種々雜多な題材に憧れて、表現を悉いままにしてゐた人々は、そろそろ短歌の形式の上に息を彈ませなくてはゐられぬ時が到來したものと考へてゐてもよいであらう。

歌壇鳥瞰

現歌壇の多くの雑誌がいま手元に無い故、廣い意味に於ける「前月批評壇の鳥瞰」などといふ文章は書けさうも無い。それに、現在の私は餘り多くの雑誌を精讀してゐないからかう云ふ題目の下に文章を書くのは不適當であるのかも知れぬ。然し、ともかくも手元にある二三の雑誌に據つて前月歌評界の鳥瞰をやつてみよう。

いま私の手元にある雑誌は「短歌研究」「日本短歌」「短歌春秋」「青垣」「短歌新聞」「短歌評論」等であるが、さてこれらの雑誌の上に現れた歌論といふものは、一體どう云ふことを問題としてゐるかであるが、先づ「短歌研究」四月號を一瞥してみよう。「子規の歌論に潜在するもの」、これは釋迢空氏の歌論であるが、かう云ふ一節に興味を覺えた。『子規の議論は、一生懸命に書かれてゐると見えるものでも、極めて常識的である。其だけ又

日本流の言ひ方ですれば極めて平明である。其議論が直に、人々に納得せられて實現せられて行つた譯でもある。』この一文によつて釋氏の言はんとする歌論の意義を解決しようとするものではないのであるが、釋氏がかう云ふ見解の下に子規の歌論を看てゐると云ふ事は、甚だ好ましい感情を吾等に抱かせるものであるが、釋氏にとつては、右の文章の表面に現はれた以外の見解を底に持つてゐられることは肯けるのであるが、私はそれをあまり詮索せずにこの簡單な一文を取り上げようとするのである。釋氏は云ふ。子規の歌論は、『人々に納得せられ、實現せられて行つた』云々であるが、これは現歌壇に於ける示唆となるべき一文ではなからうか。現歌壇には歌論家は數多いが、歌論を納得せしむる力、實現せしむる力、さう云ふ歌論を書く人のいかに稀であるかを思はしめるのである。釋氏がそれを喝破して以上のやうな子規に對する見解を發表されたと云ふ事實は歌壇の進歩を意味するものである。次ぎに、松村英一氏は、「短歌の散文化」と云ふ歌論を發表してゐる。かういふ一節を抄錄しておく『歌壇は久しく「アララギ」の寫生の流風に膠著して自由を失つた觀があつた。社會性を要求したり、近代都市の景觀を詠はうとしたり、或

はまた階級的見地から短歌に大衆性を要望したのを、一種の流行相として見た人もあつたが、實はこの倦怠がさせたことであつて、一方には現實の諸相が吾々に極めて緊迫した問題を展開したところに理由がある。』つまり松村氏の謂はんとするところは、『アララギの寫生の流風に膠著して自由を失つた』云々から發足して、現在の散文化を現出せしめた、と云ふ意味があるのであるが、松村氏は、私のかう云ふ解し方に不滿足を感じられるかも知れぬが、ともかくもアララギを眼中に置いての歌論であることは否めないのである。そこで私は思ふのであるが、『自由を失つた』と云ふ見解はうそであると思ふ。むしろ、『自由を與へられた』のではないのか、與へられたものに據つて歌壇は動いたのではなかつたのか、と同じ意味に於てアララギにしても歌壇から自由を與へられたのではなかつたのか、現歌壇は倦怠したのではなくて我儘になつたのではなかつたのか、散文化の短歌の流行は、商品見本に等しいものではなかつたのか、決して現實の諸相が緊迫したからではないと思ふ。さてそれらの作品は、多量生産的に大いに活躍したのであるが、一體その一つ一つの短歌の形態を、少しも極めようとしてゐないではないか。そこで私は、松村氏の結

論を否定する。『散文化の傾向は、言ひ換へれば新を求むる精神で、意義もまたそこにな
ければならないと思ふ。』この松村氏の言ひ方は、甚だ危險千萬である。柳田新太郎氏は、
「プロレタリア短歌々論の變遷」と題して、かう云うてゐる。『「アララギズムの教義の第
一章には「短歌に思想は盛れない！」と示されてゐるではないか。しかし、現前の事實はこ
れを明らかに否定する！——若き短歌作者の一群は幾年か痛ましい苦惱を味ひつつあつた
のである。』私は云はう。短歌に思想は盛れない、と。果して現時の短歌は思想を盛り得
てゐるか、柳田氏は容易に思想を盛り得たとする作品を提示してくるであらうが、しかし
待ち給へ。短歌は思想を盛るべきものであるとする時、その作品は短歌の形式を離れたも
のとなるのである。そこで柳田氏に簡單に言はう。短歌の形式をもつて思想を述べること
はできるが、盛ることはできないと。思想を盛らうとする製作態度は、短歌の本質を忘却
するものであり破綻を生ぜしむるものである。歌はあくまで歌であつて、思想を述べよう
とするさへ、歌としての退歩を意味する事になるのである。かつて「無產者短歌」といふ
一文を發表した大塚金之助氏に、短歌製作の不可能となつたのは、よくこの事實を語つて

ゐるのである。柳田氏は、『大塚金之助の一文によつて目覺まされたひとびとの第一の關心は』などと云つてをるが、果して個人として優ぐれた作者達が出現したであらうか。大塚氏はなぜ短歌製作を止めたのであらうか。柳田氏は言ふであらう。出現しつつあると、そこで私は再び言はう。大塚氏はなぜ歌を止めたのであらうか。

「自由律の諸運動」は大熊信行氏の歌論である。結論に曰く、『短歌文學の領域は、ひとつの傳統的な社會領域である。この領域の制約をうけることは、われ〳〵の運動に正當な歴史性をあたへるゆゑんなのであるから、この領域を逸脱していいはずはない。領域の解體も領域の擴充もいゝが、領域からの逸脱は自己消滅である。だからといつて、「短歌」といふ名稱にすがらんばかりに、この一形式的規定性のみを論じてゐるのは、あたらしい國詩運動としての最も大きな課題を全くわすれたものであり、「短歌革新」の窮極的到達點を誤解したものである。』この大熊氏の歌論は、あだかも僧侶が珠數玉を指でまさぐりながら、のんべんだらりとものを言うてゐるやうであつて、かういふ人が歌壇の領域に存

在するのは、一つの面白さとみてよい。

次ぎは「短歌春秋」四月號に移らう。此雜誌としては珍らしく多くの歌論が掲載されてゐる。曰く、「本質に觸れた改革」釋迢空氏。「現實性強化の傾向」松村英一氏。「定型歌壇批判」矢島歡一氏。「定型三月歌壇管見」逗子八郎氏。「アララギ批判」島田忠夫氏。等々。これらの諸文章の中に盛られてゐる歌論なるものは、結局は短歌禮讃の聲であつて、たまたま逗子八郎氏が、所謂定型律の作品評を眞面目に一首づつ試みてゐるのであつて、逗子氏の批評は、どうも試驗の答案のやうであつて具合が悪い。逗子氏の批評の結論を引用すればかうである。『偖以上で定型妄評を終るが、一言新短歌作者の自分にいはせて頂くと、定型の人達はよくも飽きずに十年一日の如く同じ様な境地に、コツコツと鑿を刻んで居られるといふ事だ。』ここで氏の言ふ、「新短歌作者の自分に」などは、どうも嫌味である。島田忠夫氏の文章になると、望鄉の念やみ難く、思出の糸を手繰つて故鄉に近づかうとするのであるが、どこが自分の家であるのか路傍に迷つて、人の名を呼んで探し求む

るの觀があり、アララギの批判どころの騒ぎではない。「日本短歌」五月號に、「新短歌の動行」と題して石原純氏の歌論がある。石原氏は、「新短歌」とか、「舊短歌」とか云ふ名稱を附して歌論をやつてゐるやうであるが、この云ひ方は、かつて明治歌壇に於ける短歌の名稱を新派、舊派と云うた、それが聯想されて、石原氏の過去を識つてゐるものにとつては、何んだか操つたい氣がしてならぬ。石原氏の歌論の文章は、上品ではあるが、火花が散つてゐない。石原氏は、何やらを對象にして論歩を進めてゐるやうであるが、石原氏の聰明さは、その對象を明瞭にしてゐない。そこにこの人の歌論の動きがあるので、もし石原氏の目差す對象なるものが明瞭にされてきたならば、一層歌壇も面白く波うつてくるであらう。氏は云ふ、『現在に於ける渾沌たる狀勢は、それの失ではなくて却つて大やなる長處である。』これはいかにも石原氏らしい見解である。

松村英一氏は、「隨感三題」と題して、批評精神を論じ、批評家の態度の墮落と云ふやうなことを述べてゐるが、大體の論旨は、「批評はもつと理解ある多力者に依つて行はれ

なくてはならぬ』云々に歸着するやうだが、この見解は間違つてゐると思ふ。短歌を愛する人々は、初心者でも、世上の作品に對つて批評を試みる用意が常に必要であつて、そこに藝術としての短歌の發展の理由が十分あるのではないか。もしも松村氏が、『批評はもつと理解ある多力者』云々の言葉をもつて信條としてゐたならば、會員を多く擁する雜誌經營者として、大きなる損失であると言はなければならぬ。

「短歌評論」は、「石川啄木生誕五十年記念號」である。渡邊順三氏の卷頭の論文に曰く、『啄木が熱烈に要求した「明日の考察」は、現在の我々にとつては既に緊急な「今日」の問題であり、彼が痛切に身をもつて感じた「時代閉塞の現狀」は、今日において愈々我々の一切を縛る桎梏となつてゐる。』渡邊氏は、「時代閉塞の現狀」と云ふ論文から、短歌評論の讀者に呼びかけてゐるのであるが、その啄木の論文の中には、短歌についての信條が語られてゐるのではなくて、一般的の文學論に落着かうとしてゐて、結局は社會思想問題なのである。啄木の文章からは、現代の短歌の方向を示す何物をも語られてゐないのである。

啄木の論說は今日の歌壇の示唆にはならないが彼の短歌からは多くの示唆を得てゐる。今日に於ける啄木の名聲が、彼の歌の存在に起因してゐることは言を俟たぬ事實である。もしも啄木が短歌を製作して行かなかつたとしたならば、啄木の今日に於ける價値は、實に微々たるものであるかも知れぬ。啄木を尊敬する人々にとつては或ひは別個の考察もあらうと思ふが、ここでは積極的な啄木批判は差控へることにする。啄木の歌は、啄木自身が生んだものであつて、傳統的な短歌の色彩を持つてゐないところに特徴がある。ここがプロレタリア短歌運動者諸君にとつて、啄木を目標とする所以である。プロレタリア短歌運動者諸君は、啄木自身の藝術を一個人の立場から凌駕して、自身の作品を完成せしむべきではあるまいか。そこに傳統的な短歌の形式を離れ、啄木の短歌の色彩を離れた作品が出現さるるのではあるまいか。然し、よく啄木の歌の調べを考察してみるならば、やはり短歌の形式が基本となつてゐるのは否めない事實である。とにかく啄木は、此の形式の下積とならずに短歌作者としての彼を向上せしめた。さればと言つて　私は、啄木の作品を絶對にちかい程度に、價値を肯定してゐるのではない。彼の歌には、表面的な甘さがあつ

て、無言の中に重要なるものを歌ひ上ぐる寂寥味が缺けてゐる。一個の藝術作品として鑑賞批判する場合もの足らなさを感ずるのである。子規の作品を對照とすることにさへ、私には不服がある。かう言へばプロレタリア短歌運動者諸君に大に叱られさうであるが。

窪川鶴次郎氏の、「啄木の先天的考察に關する一私見」の文章中に、左のやうな一節がある。

『正岡子規の歌において、その內容となつてゐる生活が當該社會の極端なまでに保守的な世界に多く取材されてゐ、晩年になつては、特にいよ〳〵詠歎調となり、その言葉においてもよく古語を愛用してゐながら、彼が短歌を自己の生活の全表現たらしめようとしたことによつて、更に死に至るまで斷じて彼岸を願はず、飽くまで宗教を否定し去つた彼岸の現實主義者としての面目を發揮したことによつて、我々に迫る力づよさを示したといふことは、啄木と全く好箇の對照をなすものである。であるからと言つて、歷史の社會主義的先驅歌人としての啄木を、その史的取り扱ひにおいてブルジョア史家の如く所謂公平にしようとするものではないが』云々。子規と啄木とを好個の對照としたところは、歌人なら

ざる窪川氏の見解らしくて興味を覚えるが、作品の上から推論すれば、好個の對照とならざるものを私は認むるのである。窪川氏は、所謂「社會主義的先驅歌人」として啄木を重要視するところから言はれてゐるのであらうが、啄木は、短歌によつて全生命を發揚しようとは試みなかつたのである。偶々社會思想問題の渦中にあつて、感覺の活動を短歌の上に開始したのである。そして彼の詩人としての天分は、社會主義者として重んじられたのではなくて、歌人として今日の盛名を馳せたのである。それは、晩年に於ける二つの歌集の上に現れた彼の姿である。

斑雪を讀む

著者は、第一歌集「青杉」以後、久しい間第二歌集の發行に意をそそがぬやうであつたが、いま「斑雪」一卷の上梓を看たことは、歌壇の爲に祝福せざるを得ない。集中の歌は、すべて珠玉に等しき磨きがかけられてをり、短歌としての本領が遺憾なく語られてゐるのではあるまいかと思はれる。されば作者の歌は、歌を學ぶ人々にとつてよき指針となるものであつて、愛誦飽くを知らぬ佳作に接することができるのである。現歌壇に於ける變化の著しい作品に目安をおく人々にとつては、題材の上に多くの變化を認められぬ「斑雪」の作風について、一種の物足らなさを感ずるであらうが、一度視野を狹めて短歌と云ふものの本質に觸れる場合にあつては、「斑雪」の作品は、調べの上に大きい變化を語つてゐるものがあらうと思ふ。作者の歌は、表面あくまで變化なきが如き狀態を示してゐるが、

内容には可成りの變動がある譯である。たまたま表面的に大きい變化を試みようとする作品が無いでもないが、作者は直ちに自らを省みて、自身の姿に立ち返つてゐるのである。

沒らむ日の光をうけてしづまれる青田のいろは久しきに似つ

「沒らむ日」はやや反省的である。考へ過ぎたとでも言はうか。「うけて」も俗調に墮ちようとしてゐるのであるが、ここはやむを得ぬところであらう。「久しきに似つ」がこの歌の生命である。この歌を發表された當時は、多くの稱讃を受けてゐるので、若き人々は可成りかうした句法にひきつけられてゐたのである。入日の光をうけた青田のひとときの色は、まさに永遠の姿を語るに等しく、作者獨得の自然觀とみていい。宗教味の加はつてゐる作品とでも言はうか。

朝々の霧晴れわたり外山なる青葉の光つねに新らし

「つねに新らし」と云ふ詞にこの歌の生命があるが、一首全體の上に流動する現實の相は所謂、歌らしいものの範疇に入つてゐると觀ても差支へあるまい。つまり、「外山なる」と云ふあたりが印象不明瞭である。ここがこの歌の輪廓的の面白味であつて、かう云ふ歌柄の愛好された時もあるのである。

山かげは眞萩しみみの花明りひねもすにして露をたもてり

濃い色の繪具によつて描かれた日本畫を觀るやうである。嚴密に言へば、「花明り」とまで印象的に言つたのが、現實味を失はうとしてゐる點かも知れぬ。しかし作者としてはかうした詞の中に、「しみみ」といふ詞の面白味に由つて慰へようとしてゐるのであるから、問題はむしろ第一句にあるのではあるまいかと言ふことになる。かういふ歌の姿はいかにも惚々させられるところがある。

降る雪をとほして見れば畠むかう竹のはやしも白くなりたり

天龍のながれゆくへは遠江雲居たなびく海

にかもあらむ
かすみ空しぬぎて高し仙丈の雪消えがたに
なりにけるかな
天龍の川すぢをこめて雲白し短夜の空は明
けはなれたる

集中に於ける逸品である。作風があたかも大理石の光澤に似て、冷ややかではあるが、手觸りの新らしさを覺える。かう云ふ歌風は、萬葉調を悟つて現代の感じ方を完成してゐると看てもよいのである。作者の歌風は西行の歌風などを咀嚼しながらここまで到達したのである。

夏ふかく木苺の實の熟れのこる山の蔭みち
下りけるかも
夏一日(ひとひ)郭公どりのなく聲は森より森に移ろ
へるらし

奥信濃の歌であるが、作者の自然歌人である一面を傳へてをり、自然の中に人の生命が息づいてゐる、それが調べの上に強く感じられるのである。森閑とした自然の光景が彷彿とする。洋畫の影響に負ふところが多い作品である。例へば、石井柏亭氏などの線によつて描かれる構圖が想像される。かういふ作品は、變化のみを求むる人々の、至り得ない境地であつて、作者の個性の落ちつくべきところへ落ちついたと云ふ感じのする歌である。

「關西移居」の作風は坦々とした中に調べの流動を示してゐる。これは一面、作風が安逸になつたとも言へるのであるが、どこまでも自然に頼らうとする作者が、いきほひ關西の空氣に慣れて自ら作品に安逸を見せるやうになつたのであるが、ここで安逸といふのは、作風が下等になつたと言ふのではなく、むしろ作者の生命に明るく拓けくるものがあると言ふ喜びを感ずるの意である。

うち連れてこの街なかに何やかや見聞かせ
むとの君がみこころ
ぞろぞろと道頓堀の人通り君より外(ほか)に知る

顔もなし

詞書の、「中村憲吉氏に伴はれて」が示すごとく、作者の歌としてはいかにも安逸である ことは否めないであらう。しかし、かういふ歌ひ方をするやうになつた作者の心境には、何かの進歩があつたとみてもよいのである。かうした方向からは、この作者の作風は發達してゆかないのではあるまいか。

草若葉やはらかにして光沁むをしむ心に人をまもれり

作者の過去の歌柄とかうした作品の持味とを照應しみるとき、作歌の上に抱懐する理想の一面を、かうした境涯によつて求め得たと云ふ感じ方である。そして歌と云ふものに對つてゐる作者の態度が過去よりも、堅苦しくなくなつてきてゐることが先づ思はれるのである。

庭なかにほのかに白き梅の花日さしくれば散るかとおもふ

蕪村の句の境地を偲ばせられる詠風であつて、恐らく、「關西移居」の諸歌は、蕪村の句の影響が多いであらうと思ふ。そこで幾つかの佳作の引用に止めて、「京都郊外」について述べてみよう。

かばかりの病とおもふときもあり障子戸に
より山をながむる

衣笠の山は木高き赤松の幹すくすくと夕晴
に見ゆ

ここにして國のはたてにうちなびく山いく
ところ夕日あたれる

北山のふかき峯より日をおかず降りくる雨
は花を侵さむ

春蟬の啼くはあはれに黒谷の山のわたりは
ただ茂り松

かういふ歌は、どうも病者の歌と云ふ感があつて、どこにも力強さを求めることは出來ない。作者としては、ある高處に觀點をおいてゐるのであるから、これらの歌のどこかに蠢めいてゐるものを看取しなければならぬ。

「斑雪」一卷は、アララギ發達史の上において重要な位置におかれてゐるのであるから、その刊行當時の環境及び、動機などを銳く觀察する人があつたならば、此歌集をめぐつて面白い問題が語られるであらう。

（昭和九年五月十日）

土田耕平氏の歌

昭和八年度に於ける土田耕平氏のアララギへ發表した歌數は五十七首であつて、アララギ以外の發表歌數を加へれば百を越えるであらう。寡作家である作者にとつては、先づ作歌數の多い年と云へるかも知れぬ。現歌壇の如く、歌の題材が多方面に亙つて取扱はれてゐる時代にあつて、作者の作歌態度を考へると、作者は、題材の變化を自己の歌の上に要求してゐない風に見える。これは作者の生活環境にも據る事であるが、性格の然らしめてゐるところでもある。一面には、誰人が作者の作歌態度にいかなる要求をしようとも、作歌に常に親むその心は、作品の上に多くの變化を求めずに向上する意氣がみえるのである。ただかういふことが云ひ得るかも知れぬ。作者に歌の無い事は、不健康の時であると云ふことである。であるが故に、氏の歌の發表欲の盛んであることは、健康狀態の時であ

ることを考へねばならぬ。昭和八年度に於ける未發表の月を擧ぐるならば、五、六、七、十一、十二の月である。約半年は發表を休んでゐる譯である。歌を發表することの好きな人々にとつては、誠に齒痒い感があるのであるが、流動しつつある氏の作品を思へば、大きい問題ともならぬのであらう。

山川のひびきの外（ほか）にものもなし四方（よも）をとざして雪ふりにけり

信濃國の山村に生を養ふ作者にとつて、このやうな歌は、極めて變化の乏しい一事象の表現であつて、單調である自然の前にゐんで、生息しようとする作者の息づかひのみしか感じられて來ぬのである。しかし、一首の上に張られた調子、これは正に作者の生存そのものを語らうとする力なのであるから、若きつけるものが多くあるのであらう。

たたなはる雲のあひだよりさかさまに光さし來（く）れ阿彌陀岳の雪

作者としては、珍らしい一表現である。歌境の上の變化はやや感じられて、きびしい寒

國の小村に、靜かな心に浸つて、驚異の目を見張らうとしてゐる、それが深く感ぜられるのである。そこで思はれるのは、自然を深く凝視してゐる作者の態度は窺はれるのであるが、どこかに感じるものは、自然そのものの相ではなくて、構成的に看ようとする自然觀照とでも云はうか、作者はそれを意識してゐるかどうか、ともかくも、構成的の現象が作歌の上に流れてゐる氣がしてならぬ。かうした現象は、作者にとつて、一つの展開とみていい。

苔水の石間（いしま）に入るは清けれどわれは病みつつ世に遠ざかる

梅雨あけの日射はすでに秋に似たり高野（たかの）の上は木さへ寂しき

右の作品の內容には、自然のみに沒頭して生きようとするものとは、異つた觀方の變化が盛られてゐるのを讀者は氣付かれるであらう。これらの歌の中には、過去の作者の姿はみいだす事はできず、寧ろ著しい變化であるそれを認めるのである。この行き方は、作者

の退歩を物語るものではなくて、自然に取り入れられたものであるが故に、先づ作者がこの點を深く意識してゆくならば、そこに一つの道が展開さるるのである。もつとも、かうした問題を作者がすでに感じられてゐて、左の歌の如き傾向を示したとしたならば、そこには又問題がある譯である。

高山の大密林にさす夕日赤錆いろに變りつつ暮る　（八ヶ岳）

印象的の歌である。大密林にさす夕日、と云ふところに深く注意すべきものがあるのであるが、四五句の表現は、先づ繪畫の手法と異らなくて、「大密林にさす夕日」の雄大さは現しきれぬのである。作者が四五句あたりの表現をもつて、實相を語らうとするならば、それは失敗に庶幾いと思ふ。であるけれどもかういふところの問題は短歌一首についての本來の批評となるものであるから、作者が明らかに批評者の言を認識すれば、そこに短歌としての問題が殘さるるのである。

以上は、昭和八年度に於ける土田耕平氏の歌に就いての感想の一端を述べたに過ぎぬのであるが、作者が、第二歌集「斑雪」を發行されたと云ふことは、甚だよろこばしい事實なのであつて、作者は無言の裡に大きい問題と業績とを歌壇に對つて寄與したのである。これは私ひとりが感じる結論であるかも知れぬ。

（昭和八年十二月五日）

其四集概評

昭和八年三月號のアララギ誌上に、其四と云ふ欄が新設されて、所謂二段組の諸氏の歌から、特色あるものを選出して發表するやうになつたことは、其一に次ぐ所謂其二の環境に對つての流動を希ふ用意に他ならないものがあつたのは否む譯にはゆくまい。そこで、この其四の欄にあつて、昭和八年度に功績を擧げた人々は誰人であらうかと云ふことなのであるが、いま極めて簡單ではあるが、作品に就いて概評を試みようと思ふのである。

松井芒人氏が永い間の病牀の生活を克服して、自然觀照に冴えをみせてきたことは、注目に價するとでも云はうか。

晴れわたる空にとびゐる蜻蛉(あきつ)かげきはまり
もなき高處(たかど)にも見ゆ

（三月號）

かうした種類の歌は、最近の歌壇にあつては齒痒いものがあらうかも知れぬが、分り易い歌ひ振りは、歌そのものの將來を語るに足りる故に、この歌に先づ共鳴を覺えるのである。柴生田稔氏、佐藤佐太郎氏の作品は、其四に於ける白眉であつて、柴生田氏のぴりぴりとする技法の冴えは、九月號の「比叡山」の一連に據つて心ゆくまでに發揚されてきた事は見逃してはならぬ。短歌に對しての信念の尤も厚い氏にとつては、いきほひ常識感を突破して獨斷の嫌ひがないとも言へぬが、それは已れを生かすうへにおいては止むを得ぬ場合があらう。

空たかき月の光はさえざえと夜半(よは)のみ山を
照らしけるかな

月並に墮する境地ではあるが、作歌の信念が、銀線の如く冴えたものを感ぜしめる。他にも柴生田氏には優れた作品があるが、差當り右の一首を引用しておく。佐藤佐太郎氏の作品は、「尾瀬沼」一連によつて、その獨自の境をきりひらいた感がある。かう云ふ作品を一年の間に、一度でも發表すると云ふ事は、先づこの現象を喜ぶべきである。

大清水となづくる澤の落合ひは音おもおも
し樹立のなかに
（九月號）

佐藤氏の歌には、柴生田氏のやうな句法の緊密さはないと云つてもよいが、そこに又歌としての面白味もあるので、つまり自然觀照の方法が、單純でなくて、無理に複雜を求めようとするところもある。これは、現代の作歌態度の一面を語るものであつて、作者の心持が深く活動すれば活動する程、作者は苦しい立場に置かれるであらう。覺悟を要すべき事實である。次ぎに女流作者としては、小柴伊都子氏の作品は、やはり注目してよいであらう。

水底に黄の花咲けり砂までゆふべのひかり
いたりゐるらし
（八月號）

「黄の花」がなんの花であるか分らぬが、そこに作者の異常神經が活動してゐる爲に、一首の上に熟慮さるるものがある。

うごきゆく霧見ゆる深き谷となり杉生がな
かの青き笹むら
木の末の霧のしづくのたまゆらにひかりて
落つる山のうへの道
（十月號）

新鮮である。取扱つてゐる題材は別に新しいのではないが、情景をはつきり讀者に迫らしむる力のある作品であると思ふ。宮脇武夫氏の左の作などは、やはり何ものかを語るところがあらう。

左より浪のひびきの横ぎれど右よりひびき
て横ぎるもあり
（三月號）

「ふたつながらわが眼は見えず」云々と歌つてゐる作者を思へば、かうした種類の歌は、作歌上の參考となるところであつて、氏の全身が、もしもつと深く作歌に打込まれたならば、この作者は、異常なる發達を示すであらう。

故人では、德田白楊氏の左の作を擧げておく。

此の日頃飯減り居ればこの冬を生きのびが

たしと心ぼそしも

（三月號）

又伴野親史氏の歌にあつては、

病牀の上の便器にかかる間こそ目の下に見れおのが周圍を

（五月號）

德田氏も伴野氏も亡くなられてから後で發表された作であるが、死に直面して歌ごころを保つ、それが深く感じられるので、狹くとも强く生きようとした作者に敬意を表せざるを得ない。

山口茂吉氏の七月號の一連には、重厚なものを感じられるので左に一首を擧げておく。

ゆふばえの雲たむろせる羽田沖よりつぎつぎに鵜のかへりくる見ゆ

（七月號）

山口氏の作品でおもふのだが、氏の歌には太さは感じられるのであるが、いまだ籠る强さが足りぬと思ふ。例へば右の歌の場合にあつて、結句の、「かへりくる見ゆ」と云ふ句法であるが、ここがつまり常套を免れないのであつて、「かへりくる」とまで云つては面

白味がなくなるのである。情景は萬邊なく歌はれてゐるが、いまだ詞の使用方法に悟るところが無い。佐藤氏の左の歌には工夫された面白味がある。同じ鵜の歌である故引用しておく。

空ひくく鵜のひとつ來てとまりしがむれ栖みし鵜はしばしさわぎぬ

（七月號）

以上諸氏の作品の以外に、題材としては、相當に發展の餘地を見せてゐる人々の作はあるのであるが、いまだ聲調の上に力强いものを表現してをらぬと思ふから、諸氏の精進を昭和九年度に期待してこの筆を擱くことにする。

（昭和八年十二月四日）

築地藤子氏の歌

築地藤子さんは、代々木に書店を經營して、ますます健在で愛子を養育されながら、歌の道に精進してゐる。アララギの女流作家の中にあつて、稀有な事實である。昭和八年に於ての作品は、僅少ではあるが、いかにも作者らしいものを發表されてゐて興味が深い。三月、四月、七月、十月、十二月の五ケ月で歌の數は二十六首である。特に優れた作品があると云ふ譯ではないが、餘裕を見せた作品が多い。底に流るる感傷味は、多方面に自己の持つ藝術感を擴げようとしてゐるところがあり、それがまだ全面的に出されないと云ふ感じである。もしも、この作者に一層の實生活上の安定があつたとするならば、歌の題材は多方面に取入れられて、自由奔放に自己の才能を擅にするであらうと云ふ感が深い。

閉されし鐵門の上に茂りたる槲の葉そよぐ

崩れくる雪

かう云ふ境地は新らしい。句法の上に別に新鮮味はないのであるが、鐵門と槲などのみつけどころは、洋畫の趣味と云うてもよいであらう。

子が病めばみとるは母吾のみ寢顏を見つついねられずけり

築地さんの歌は、以前から餘り推敲はしないやうであるが、これらの歌をみてもやはりさうした感じがするのである。「みとるは母吾のみ」あたりの手法は、一面餘裕なき生活の發露とみてもよい。

山めぐりい行きとどまらぬ山水の清けかる

にぞわれは寂しき

「小田原行」のうちの一首であるが、着想に別に異色があるのではないのであるが、自然を凝視する作者の觀照力が圓滿に行きとどいてゐる作品である。力瘤を入れてゐないので あるが、豐かな內容を持つた作品である。

家裏の山査子の花を惜しむまもあわただし
く開店ひと月は經つ

大した歌ではないのであるが、代々木書林の開店と、山査子、そこに興味があればある
と云へるかも知れぬ。

あやまちてだにわが身に手なふれそたちま
ち怖れむかたつむりの如く

作者に似合はず主觀の露骨な作品である。表現はなかなか手に入つてゐる。味ひ方によ
れば表現が露骨のやうであるが、作者は相當考へてゐるやうである。作者の心を壓する何
物かの掩ひをじつと感じながら、その一部分からくる感じに、意識を働かさうとしてゐる
のである。そこに現實らしきものをみいださうとしてゐるのである。

磯濱にひろへど盡きぬ貝ひろひ涙ぐましも
潮ざゐの音
濁り海に高々湧ける雲の峯かなしみはなべ

て雲の行方に

「涙ぐましも」とか、「かなしみはなべて」云々の句など、甘くなるところであるが、甘
く響かぬのは、作者の踏み締めてゐる生活が新らしいからである。

代々木野の黄葉はいたく染まらねど歳晩近
むとふ心せはしき

すでに作者の生活は地についてゐる。この歌の上句の表現は、餘程その感が深い。

啄木について

今更啄木でもあるまいが、何んと言つても現代に於いては、啄木の歌は多くの人達に愛好されてゐるのであるから、やはりその研究は多く顯れるであらう。ここで云ふ多くの人達と云ふのは、玄人の歌人ではなくて主として短歌と云ふものをこれから學ばうとする、極く初歩の人達を指すのであるが、かうした初歩の人達の心を惹き付ける作品は、何んとしても啄木の歌なのである。啄木の歌は、いまの一般社會性に合致してゆく人情の機微を巧妙に捉へてゐる爲に、短歌を作らぬ一般社會人にも受け容れられるものを持つてゐる。これは否めない事實である。白樺細工の掛物にも啄木の歌は印されてゐるのであるから、かう云ふ點においては、明治大正歌壇史に特異な存在として擧げられてもよいのであらう。以上のやうな啄木に就いての感想は、歌が初歩向きであると云ふことから、現代の作物よ

りもずつと下等のやうに批判される傾きもあらうが、決して啄木の歌は現代の作物よりも下等でなく、もつとも進んだ道を歩んでゐたのではあるまいかと思ふのである。啄木は、歌は悲しい玩具であると言うてゐる如く、短歌と云ふ本質については、高い理想を持つてゐなかつたかも知れぬ。短歌の本質に向つて自己を投げ出さうとするよりも、もつと大きな理想を抱いて社會に直面してゐたのであらう。その頃時代は將に自然主義運動の後期に入つてゐたのである。啄木をして言はしむれば、

文學――彼の自然主義運動の前半、彼等の「眞實」の發見と承認とが「批評」としての刺戟を有つてゐた時期が過ぎて以來、漸くただの記述、ただの說話に傾いて來てゐる文學も、斯くて復た其眠れる精神が目を覺して來るのではあるまいか。何故なれば、我々全青年の心が、「明日」を占領した時、その時「今日」の一切が初めて最も適切なる批評を享くるからである。時代に沒頭してゐては時代を批評する事が出來ない。私の文學に求むる所は批評である。

以上は、「時代閉塞の現狀」と云ふ論文の結末の文章なのであるが、かう云ふ一文の中に偶

々啄木の本音が聞かれるので彼の短歌に就いて言及するに好都合なのである。彼は、「時代に沒頭してゐては時代を批判する事ができない」と言うてゐるが、彼は時代を批評し得ざる人ではなかつたのか、そこに彼の文學があつたのではあるまいか、彼は大きい時代の渦の中に感覺の冴えを感ずるのみであつたのであらう。短歌はさう云ふ時の所産である。この所産は、啄木にとつて偶然なる大きい收穫であつた。

（昭和九年四月六日）

峠路評

森山汀川氏歌集「峠路」は、人事歌で全部をうづめてゐると言つてもよい程で純敍景歌は、數首にすぎなく、かういふ點から言うて、純人事歌集とでも言へるであらう。作者青春の頃の作は無いとしても、飽迄も人事との交渉に深い觀照の力をもつた作者は、極めて平凡な日常の人間生活の上にあつて、平凡そのものを歌に引き上げてゆく細密な苦勞性を持つた歌人である。長い間の作歌生活から、そして人生の五十の年輩を過ぎた作者が、始めて出版されたこの「峠路」は、私達青年の徒にとつては、深甚な敬意を表さなくてはならぬものがある。作者にもしも中村憲吉氏の歌のもつ色彩が加味されたならば、作者のもつ藝術味は一層に複雜な進行をみるであらう。然し作者には、作者としての一つの道が開かれてゐるのであるから、そこに長い時間をかけて、ゆつくり歩まれる事も一つの方法な

のであらう。ここで思つたことであるが、「峠路」には、一巻の上に看られる波動の起伏が一寸はつきり摑み得られぬ。どういふ所から作歌が變化しつつあるか、それを觀取するのが困難である。それと「峠路」は連作的の妙味を強く高揚してゐないところがあつて、むしろ一首づつのうへに妙味があると看るべきであらう。これは歌集編纂の方法に據つて必然に生じた問題であるかも知れぬ。然し、私のみが考へられるところの問題であるかも知れぬ。

私は、「峠路」の大正二年から、昭和二年までの作品に作者の本質的のものを多く看ることができたが、その本質的のものをいかに内容的に生かし、寂寥の境に潤澤な妙味を表現してゐるかは、昭和二年度のいくつかの作品の上に看られることを言ひたい。例として左に抄出するならば、「日常」の三首である。

裁臺に日ねもす向ひ縫ふ妻に二階下り來て
言交しつる
妻子らにうとくあらむとあらねども飯食め

ば立つ癖ぞつきぬる
戻り來て靴脱ぐ土間にわが子らが遊び捨て
けむ螽とびをり　「日常」

極めて平凡な日常の人間が行ひつつある起居を歌つてゐるに過ぎないが、歌の上にかういふ道が拓かれていつたといふ事は見逃してはならない。

月ありて糠雨きらふすがしさや蚊を叩きつつ濡縁にをり
寢卷着てわが傍に遊ぶ子に項揉ませて目をつむりゐつ　「夜半」

「月ありて糠雨きらふ」などといふ表現は、いかにもこの作者らしきものが多く含まれて居て、嫌味にひびかぬ。「糠雨」などと言ふ詞を短歌の上に生かすのは面倒なのであらう。次の「寢卷着て」といふ詞にしても、この作者であつたから生きたといふ感が深い。かうした人事的の歌からは、大きい結構の調べなどは要求できないが、現代の歌人は、「峠路」

の作者が歩いてゐるかうした歌の世界をも、深く洞察する心掛けがあつてよいのである。

以下、少し此作者としては稀にみる自然詠の諸作を抄出してみよう。

小山田の水をとぼしみ植ゑかねる早苗よれ
たち時過ぎむとす

夕づける片山かげに徑ありて馬おとなしく
麥負ひ下る

月重ね往來し居りて道のべの小草の花も唉
き變りたる

硝子戸ゆまともに見ゆる岩崩えの八峯の紅
葉素枯れはてたり

朝日かげ射しそふ庭に柿の葉の落ち散る見
れば霜をかづきぬ

さむざむと雪をかづける駒ケ嶺の深きはざ

まに日の照れる見ゆ　「甲斐長坂往反」

これらの諸作には、深く自然を凝視した後の感動がある。外に騒がしく顯れるところが無くて、哀愁さへ覺える。甲斐國長坂は、なかなか佳い風光を持つた土地である。作者はこの長坂へ萬葉講義をしにしばしば通はれてゐた。私は今、それを思ひ出しながら、この「長坂往反」の一連に深い愛着を持つ。

幾尋に湛ふにかあらむ澄む水の湖のなかよ
り山はそばだつ

沖つべはいよいよ澄みていろくづも浮藻も
見えず陽の色透す

群山の紅葉づる上にきはやかに雪をかづけ
り富士の高根は　「箱根行」

なにか若々しい調べである。作者の自然に對ふ態度は、自然を大觀しようとするのではなくて、自然に直面して離れまいとする努力である。ここに作者としての獨自な歌境が拓

かれてゐるのであらうと思ふ。

末枯れし夕の坂に何にかも焚き捨てし火のきほひづきをり

裏庭の凍れる池にしばらくをゆふべの月の映りつつあり

床下ゆわが掃きいだす紙屑の吹きちらばれり凍土の上に

やうやくにきびしき寒さ過ぎぬらし肩おのづから凝らずなりたり

子を持たず閑に暮らせる人ありて雲雀鳴かせぬ春早くより　「折々の歌」

特殊の境地を歌はうとしないかうした作風は、作者が、歌の道を歩むこと長ければ長いほど地味な落着きと、平凡でありながら追隨を許さぬ作品となつてゆくのである。次に引

用する歌などにしてもこの感が深い。

将棋さして心やらむと待つ兄に何のさやりぞいまだ來らず

買ひおきし酒は饐えてぞありぬらむ四月を かけて待つ兄の來ず　「兄と甥」

かういふ歌の底に流れてゐるものは、深い骨肉の情であつて、一筋に他を顧慮する暇なく、自分の眞情に離れまいとする製作態度であつて、つまり自己の歌ひ上げてゐる歌の境涯を信じて他を豫想してゐないと云ふ事なのである。年久しく作歌に沒頭してゐた社會人たる作者に、かうした作品が生ずるといふのは、歌壇意識に浮身を窶してゐる現今の歌人に比べて甚だ興味ある對照なのである。

次に引用する歌は「峠路」の終りに於ける羇旅の歌である。これは集中の佳品であり、青年の徒には、かうした地に着いた羇旅の風詠は容易に爲し得ないであらう。

竹林院に日高く宿り手ぶらにて西行庵にた

だちに向ふ
いづかたに下らむも遠き山かげの土を平ら
して庵建てたり
夏の日は檜山がかげにかたぶきて西行庵は
すでに小暗む
金剛山に沈みゆく日は血潮もて天津御空を
刷きしよりかなし
稍ややに小暗む峯の歸り路ははや松風の音
もこそせね
痛めたる足の指より出づる血のこごるまま
にし夕べ下れり　「吉野所々」

詞書に「中村氏と明日香に別れ齋藤氏に從ひ吉野に出で、土屋氏一行と落合ふ」とある。この土屋氏一行の中に私もゐたのであるから、森山氏が齋藤氏と共に、夕暮れに近い頃の

西行庵に行かれた時のその光景を私はよく記憶してゐる。大峯山から吉野に下つた土屋氏の一行が竹林院に著いた時、竹林院には明日香から先着された齋藤氏、森山氏が私達一行を迎へられ、道すがら、西行庵に立寄つたことを話すと、すでに夕暮に近いと云ふのに、森山氏は齋藤氏と共に、檜山の陰に傾く日影を踏んで立つて行かれたのである。作者が金剛山に沈みゆく日を眺めながら感嘆してゐた頃、私達は腹を減らして待つてゐたのである。

私は何故か右の一連が懐しい。いま「峠路」評を終るに臨んで、抄出した歌以外に、もつと、世相に深く親んでゐる歌のあるのを見逃してゐるはしまいかと云ふ不安がある。それは、はじめの方の島木赤彦氏存命中の頃のものを抄出してゐないといふことである。これは、その頃の作に佳いものが無かつたといふのでは無い。現在に於ける「峠路」に對する批評の方法として敢て抄出しないことにした。

森山氏が益々多幸であることを祈つて擱筆する。（昭和八年一月十七日）

昭和八年度版年刊歌集寸評

先づ歌の表題が變化してきたのは事實である。いくつかその表題を抄出してみる。「あ
る三角戀愛」「アグノヂー」「雲の行方」「感激」「葡萄は稚し」「かなりやと吾子」「巴里風
景」「動物園の春」「ある寫眞畫報」「血にうゑるもの」「裸の勞働者その他」「日の照る道」
「悲運の中に」「電力と青ぞら」「業火に合掌す」「遊惰な手」「晩秋風景」「まだ起きて」「安
之助と禹貴卿と」等である。これはまさに美術展覽會の產物に等しい。私は思ふ。歌壇が
このやうな表題に甘んじて歌を作つてゐるうちは、時勢を抽んづることはできないと。だ
が作者は、何もかうした題目によつて歌を詠んだのではあるまいが、少くとも、製作する
時の心の何處にか、それを感じてゐたと云ふのは事實と看てよいであらう。「年刊歌集」
を批評するに當つて私はかう云ふ問題が念頭にのぼつた。

いま全部通讀して佳作を得ようとしたが、あまりにも共鳴すべき作の尠きを思ふもので
ある。批評して看たいとおもふ幾人かをここに擧げてみるならば、石榑千亦、早川幾忠、
橋本德壽、半田良平、土岐善麿、大熊長次郎、岡山巖、尾山篤二郎、大橋松平、若山喜志
子、川田順、吉植庄亮、相馬御風、臼井大翼、窪田空穗、矢島歡一、前田夕暮、松村英
一、相坂一郎、佐佐木信綱、北原白秋、北見志保子、水町京子、釋迢空等の諸氏である。
つまりこれ等諸氏の作品には感じの練れたものがあるので批評する氣になるのである。以
下これ等の諸氏の作品に就いて寸評を試みよう。

部屋深く楓の冬木影さして午後は氣溫の降
るこのごろ

早川幾忠氏

趣味的の歌である。「部屋深く」と云つたならば、「影さして」とまで云ふのはどうか、
「氣溫」と云ふ詞の音調がいい。早川君は、かう云ふ歌に滿足するのは禁物である。「影さ
して」と云ふ表現も嚴密に云へば、獨斷的であらう。

沖合に艦隊來れば呵怜なり渚に立ちてわが

まなこうるむ

橋本徳壽氏

橋本君の歌には、「豪華」な味がある。橋本君はさう云ふところを目標に置いてゐるやうであるが、歌はなかなか橋本君の思ふとほりには歌へぬものなのである。「呵怜（あはれ）なり」は少しも、この歌の全體に響きゆくものがない。「呵怜」と云ふ詞に惚れこんでしまつてゐるのである。なにがあはれであるか分らぬ。

戰が起きて幾月（いくつき）「生命線」「權益」といふ語も聞き
慣れにけり

半田良平氏

常識感情を一歩も出てゐない歌である。作者は誰に對つて歌はうとしてゐるのか、その對象をはつきり歌の表題に付したならば、半田氏の面目の躍如たるものがあるであらう。

かるく敲（たた）いてゐるドアのそとに彳んでゐるのであらう。朝起きた彼は、苺の味と
の彼女とを感じる

土岐善麿氏

女が苺を器にでも入れてドアのそとに彳んでゐるのであらう。朝起きた彼は、苺の味と彼女の匂ひが感じられると云ふのである。朝の苺と、朝の彼女、かう云ふ表現法は、前田

夕暮氏の方が徹底してゐるのであらう。善麿氏と夕暮氏とがもつと徹底してくると歌壇は面白くなるであらう。

春日照らふ阿賀街道の砂埃來寄りそれむか
こころ山かげ

岡山　巖氏

砂埃が濛々と立つて山かげに逸（そ）れると言ふのであるが、砂埃だけに具合が悪い。霧とか雲とかであれば自然なのであるが。

棕櫚の葉の新（あらた）なる葉はいさぎよし雨の眞雫
秀につづりたり

尾山篤二郎氏

「いさぎよし」は利いてをらぬ。「眞雫」も凝（こ）つた云ひ方であつて、ぴんと來ない。「秀につづりたり」これはまさに美文調である。作者だけいい氣持の歌。

あしびきの山原のみちを一人なり押し照る
月はやうやく中空（なかぞら）

川田　順氏

いかにも上手さうな歌である。新古今の歌を現代語に分り易く譯したやうな歌。「あし

びき」この枕詞が失敗してゐるのである。かういふ歌の調べに味ひ深いものがあると思ふ時代もあるものである。

きざしつつ遂にそれたる颱風の餘波(なごり)吹き居り花ざかり田に

吉植庄亮氏

一二句の表現は颱風の狀態を云はうとしてゐるのであるが、細かすぎる。「遂にそれた」あたりから一氣に詠み下す可きであらう。

となり家のうぐひすの聲ききながら地しばり草の根をひきなやむ

相馬御風氏

この歌には何かある。相馬氏の歌にかう云ふ歌境をみると云ふのは珍らしいであらう。私なら、「うぐひすの啼くをききながら」とするであらう。

いかづちを聞きてねむりし夜は明けてまた事もなし陽のさしにける

臼井大翼氏

「また事もなし」に味ひを持たしてゐるのであるが、やや獨りぎめの感がある。「いかづち」などと云ふのは拙い。作者はかういふところがまだ悟れぬやうだ。結句はいい。

薄原踏み入りたれば丈に餘る白穗(しらほ)のさみし分けに分け入る

窪田空穗氏

さすがに老練と云ふ氣はするが、「踏み入りたれば」と動作をここで云ふのは嘘である。「丈に餘る」と云ふのも苦勞が足りぬ。作者に、もう一氣と云ふところの元氣が失せてゐるのかも知れぬ。

氷結した遼河を横(よこ)ぎる砲車、うなりを空にあふり上げる

矢島歡一氏

日支戰亂の寫眞を眺めての亢奮歌である。この歌の表現法は相當成功してゐるのであらう。惜しむらく、「砲車」と云つて句讀點を打つてゐるのは歌の偉大性を失ふものである。「から注意しなければならぬ。

ながれるながれる柒つ葉服の堵列、うちふる赤旗、黒旗

前田夕暮氏

それは、メーデーに参加する群集を歌はうとしてゐるのである。茶つ葉服を着た労働者が街上に堵列して、赤旗や黒旗を振つてゐると云ふ光景なのである。この程度の観察、この趣味、前田氏は自分の年齢を考へなくてはならぬ。カフエーの二階から見た、茶つ葉服の堵列。赤旗、黒旗。ながれるながれるでは困るであらう。

人ゆけばまつはり動く霧白し　あはあはしき
山のひと平

松村英一氏

松村氏の歌になると巧みさが目立つ、それだけ技巧的である。「まつはり動く霧白し」は拙い。「あはあはしき山のひと平」はやはらかみのある句法である。上句と下句と融合してをらぬ歌である。

月の半の小さき白雲消えやらぬ太虚回轉の
一時を見つ

相坂一郎氏

地下で働いてゐる相坂君を想像してこの歌を味ふと考へさせられるものがある。「月の半の」は意味がとりにくい。「太虚回轉の一時」は少し舊くはあるまいか。

冬の田の門田の泥にふる雨のこの夜氷雨の
音立てにける

北原白秋氏

調べが堅い。一二句と、四句あたりの言ひまはし方がくどい。

紙數が盡きたから、甚だ不用意な批評であつたが、ここで擱筆する。（八・七・六）

短歌といふもの

短歌といふものを、絶對に信頼して、そこに自分の姿をみいださうといふ人が現歌壇に存在してをればこそ、現歌壇はいまのやうな隆盛を看たのであらう。それはたとへ技巧の熟達した大家でなくとも、いまだ初歩である人にも、短歌を信頼する人があつたならば、さうした人達の心の顯れは、まことに現歌壇興隆の基礎となるべきものなのであらう。

短歌を創造する上に無くてはならぬ心の顯れと謂ふのは、短歌の形式をかりて自己の感動を述べようとするのである。萬葉集卷七の物に寄せて自己の心を述べようとしてゐる短歌、そのいくつかは平凡作ではあるが、心の顯れと謂ふものが閃めいてゐる爲に、なかなか興味深いものがあると思ふ。たとへば戀愛の場合において、自分の心を女に直接に告げる事のできない時に於いて、草木を詠んだり花鳥を詠んだりしてその裏に暗に自己の本心

を語らうとしてゐるのである。さうした一つの表現は、短歌といふものに限らず、一般社會に於いて行はれてゐる事實なのであつて、特に短歌などの形式の上にこの事の行はれると言ふのは、一般の社會的現象から見て甚だ面白いのである。

かうした考への下に、萬葉集に於ける所謂、物に寄せて思ひを述ぶる歌のいくつかを持出して、それを味はつてみようと思ふのである。そこから短歌と言ふものの本質が窺はれるとしたならば、甚だよいことなのであらう。

衣に寄す

今つくる斑（まだら）の衣目（ころも）につきて吾に念ほゆいまだ着（き）ねども

「今つくる」はいま作つてゐるとはつきり解さなくともよい。單に斑の衣のことを言はんが爲の詞として味はへばよい。模樣の織り出された衣は目につき易い。いまだその衣を身に著たことが無いがといふのである。或ひは衣を女に譬へたとも解される。女は斑衣（まだらころも）のやうに美くしい。さう思つてゐるもののいまだ相見ないと言ふのである。

同じく

かにかくに人はいふとも織り次がむ我織物の白麻衣

色々に人は言ひさわぐかも知れぬが、自分の織らうとしてゐるこの白麻衣を織り次がうと言ふのである。或ひは白麻衣を女になぞらへたのであつて、思ひを續けて人に逢はう、とやかく人々は噂さをするであらうが。と言ふのである。

玉に寄す

あぢ群のとを寄る海に船浮けて白玉採ると人に知らゆな

「あぢ群」は鴨に似た鳥である。あぢ群が寄つてゐる遠い海に船を出して、白玉を採らうとする、それを人に知られることなかれと言ふのである。白玉は眞珠の類のものと解しておけばよい。例へば、あぢ群のとを寄るといふのは、人言のうるさい世の中で、白玉即ち女を得ようとする、その心を人に知られるなと言ふのである。「とを寄る」は遠くから寄

つてくるとも言へるであらう。

衣に寄す

橡の衣は人皆こと無しといひし時より着欲しく念ほゆ

萬葉集古義の解釋によれば、「橡の衣は古へ賤者の服にて、さて賤者を其の服もて、やがて橡の衣といへるなり」と言つてゐる。つまり「ツルバミ」は染色の具に用ゐられるものであつて、「ツルバミ」によつて染色された衣は、賤者がおもに著るといふ風になつたのであると解される。その橡の衣を著た人は、世の中に煩しさが少くてよい。さう思つた時から自分はその賤者が心にかかつてならぬ、と言ふのである。作者が身分の低い女などに心を寄せて、思慕の情のやるせなさを短歌の形式に寄せて歌つたのである。「橡の衣は人皆こと無し」といふのは、「橡の衣は紅などの如く目にたたぬ物なればそこを事なしと云へり」と萬葉集代匠記では述べてゐる。賤者云々の説よりもこの方がおとなしくてよい。

同じく

橡の解濯衣のあやしくも殊に著欲しきこの
夕かも

「解濯衣」は解いて洗つた衣。あるひは、人に譬へてもと逢つた人、交際を中絶したとも解してもよい。つまり一度交際を中絶した人に又逢つてみたいと思ふこの夕であると言ふのである。表現されたもののみに據つて解すれば、橡の解濯衣が殊に著てみたいと思ふこの夕べであると言ふ。巻十二に下の如き歌があるゆゑ引用しておかう。「橡の衣解洗ひ又打山もとつ人には猶しかずけり」

草に寄す

冬ごもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも吾が情焼く

「冬ごもり」はここでは春の枕詞となつてゐる。野を焼く人はといふのは、人を戀してゐる熱情を表現してゐるのである。つまり戀をもつ人の心の苦しさは、自分の心さへ焼くがごとくであるとさは、焦ちさに止まらず自分の胸も焼けるやうである、と言へるであらう。それとも單に春の大野を焼くといふ現實と、それに據つて強く湧き上がる思慕の情の苦痛を述べたのであらう。「思ひに燃ゆるを言へるなり」といふ解は簡單で要を得てゐる。

同じく

吾が屋前に生ふる土針心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな

「土針」は「野榛」のことである。自分の家の庭に生へてゐる野榛よ、他人の衣に摺られることなかれ、であつて、つまり「土針」を女に喩へたことにもなるのである。やうやく自分のものとなつた女を、他人にとやかく言寄られることを心配してゐるのである。「心ゆも想はぬ人」と言ふのは、眞實の心から思つてゐないその人の心をよく知らなくてはならない、と注意してゐるのである。

同じく

鴨頭草に衣色どり摺らめども變ふ色といふ
が苦しさ

鴨頭草は、現今でも野の路傍によく繁つてゐる露草、一名螢草と同種類のものであつて、碧色の小花で甚だ可憐である。鴨頭草で染めた衣は、水がかかるとすぐ色が褪め易い。鴨頭草で衣を色どり美しく染めたいと思ふけれども、色が變り易いとかねて聞いてゐる、それを思ふと何か心が苦しい、と云ふのである。佳人の心の移り易さを暗に嘆じたのである。

花に寄す

春日野に咲きたる萩は片枝はいまだ含めり
言な絶えそね

春日野に萩の花は咲きはじめたが、片枝はまだ蕾のままのところがあると云ふのである。片枝といふのは女のいまだ成人してをらぬ事を喩へてゐるのである。妻とするには早い、成人するまで交際を絶やさずにゐよう。この結句はなかなか味ひがある。

藻に寄す

潮滿てば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく戀ふらくの多き

磯の草は藻のことである。海の潮が滿ちて藻が浮沈するその光景は、あたかも水にかくれるやうである。その藻は、「見らくすくなく戀ふらくの多き」と言ふ表現に甚だ相應しいと思ふ。相見る事が少くて餘計に戀慕の情が繁くなると言ふのである。

以上抄出した歌は、萬葉集卷七の「譬喩歌」に據つたのであつて、直接に言へぬ思慕の情を表現する場合にかくのごとく「譬喩歌」となつて表白されたと言ふことは、萬葉集の歌が、一面、このやうな形式のもとに發達して來てゐるからで、それが今更のごとくに考へられるのである。しかし、かうした歌が萬葉集本來の姿と觀られないのは申す迄もないであらう。ただかう言ふことが言へる。萬葉集のあらゆる歌を味はふことに據つて、たまたまいかなる拙劣な歌があるとしても、その歌から何物がそこに生れつつあるか。それを

看取することなのである。萬葉集と言へば直ちに人麿や赤人のみに據つて歌の世界は進展するとは限らぬ。萬葉集の中に於ける平凡ながち人麿や赤人が想起されるのであるが、あな事實、讀者は先づそれを念中におかれたい。

かういふ意味で今回は、萬葉集中に於ける有名な歌と言ふよりも、無名作家の作品のいくつかを擧げたのである。そして、ところどころに解釋を離れた雜文を挿入してゆかうとするのである。一首に就いての批判を餘り言はぬため、鑑賞としての面白味を失したかも知れぬ。さういふ點は讀者よろしく補つていただきたいのである。參考書は、代匠記と古義の二つにした。代匠記の解は容易に寄り付けぬ名解釋がある。それを思ふと、この小文の鑑賞のいかに平凡であるかが對照されて忸怩たらざるを得ない。しかし、現今では、萬葉集の解釋といふものは可成り進んでをる故、初學者もたやすく意味を了解し得るといふ幸せを有つことが出來る。ただ、作歌者の立場にあつては、萬葉集を自分のものとして讀んでみるそして自分勝手の解釋をしてみるがよろしいのであつて、年齡によつて幾分解釋に相違が生じて面白いのである。特に譬喩歌などの解釋は、様々に解し得るのであつて、

德川時代の學者の解と、明治時代の學者の解とが、自分を主として考へることに據つて相違の生じてくるのは事實であつて、さう言ふ點からしても、現今の歌を作る人々は、萬葉集を自分のものとして様々に味はつてみるのがよいのではあるまいか。

譬喩歌の解釋はむづかしいのではあるが、あるところまでは現在の世態感情をもつて味つてみてもよいのであるから解釋をしてみるのには面白い對象なのである。

歌會などで常に經驗することなのであるが、多くの歌人が集合して、各自の詠草を批評する時に、現今の歌會の場合にあつては、作者の名を不明にしておいて批評する事が多い。たまたま批難された歌が、技巧熟達の士の作であつてそれが批評後に判明した場合、人々はうなづき合ひながらその詠草を再び吟味しようとする、そして、作者不明の歌であつた時よりも、作者の明らかになつたその歌が一種の光彩を添へる感じを抱く事がある。これは、その作者の地位なり、過去に秀歌を遺してゐる閲歴を想起することなどによつて、幾分鑑賞の上に變化が生ずるのは否めない。ただここで作歌者として考へなくてはならぬことは歌會の席上吟が、たまたま多くの人達に批難されたと言ふことは、その瞬間に於いて

一首の歌の價値は低められたのであるから、この瞬間の價値批判も、相當長い年代の上に移しても考へられるのであらう。

萬葉集中の作者未詳の短歌は、後世の樣々の人によつて解され來つてゐるが、大體同じ解釋に落着かうとしてゐる傾きがある。然し歌の價値と言ふことを問題としてくれば、甚だたわいない歌も多いといふことにもならう。故に、時によつて、歌會席上に於いて作者不明の歌を批判するが如き態度をもつて萬葉集中の作者未詳の歌を研究してもよいかも知れぬ。これは萬葉集を冒瀆するのではなくて、現今の短歌作者は、こんな風に考へてゐてもよいのではあるまいか、否、そのやうな傾向がありはしまいか。ところで、萬葉集中には問答歌と言ふものがある。この問答歌は、萬葉集の歌を解釋する上に甚だよいヒントを與へてくれるものがある。それは、一人の作者が詠じた短歌に他の一人が歌をもつて答へてゐる風になつてゐる。そこに當時の歌人の歌に就いての解釋の面白味が窺へる。それはきはめて僅かな個所の上に顯はれてゐるのであるが、例として問答歌のいくつかを解釋してみよう。

音のみを聞きてや戀ひむまそ鏡目に直(ただ)にあひて戀ひまくも多く　（問）

この言(こと)を聞かむとならしまそ鏡照れる月夜(つくよ)も闇のみに見つ　（答）

この二首は卷十一にある問答歌である。ここでは「問の歌」「答の歌」として解釋してゆく。この問の歌は、四句を、「直に相見て」といふ訓み方もある。私は原本の儘で訓んでおきたい。「目直相而(メタダアヒテ)」云々。然し現今では、「直に相見て」「目に直(ただ)にあひて」と云ふ訓み方が有力のやうであるから、讀者はよろしく鑑賞すればよろしい。さてこの歌の解釋なのであるが「まそ鏡」は言ふまでもなく枕詞。「音のみを」といふのは、噂ばかりを聞いてといふことである。美しい人であるといふことを聞いたのみでこれ程戀しい自分の心は、直接目と目とが逢つたならばどんなに戀しさが募ることであらうと云ふのである。それと

も、噂ばかりを聞いてゐるのが堪へられなくて、逢つてみたら尚戀慕の情が烈しくなつたと云ふことにもなる。答の歌の解釋はかうなる。答の歌の作者が、問の歌の調べに對つて、「この言を聞かむとならし」と簡單に和してゐるつてきてゐるところ甚だ愛嬌があつてよい。つまり歌の上に顯れたそのやうな君の心を聞かうとして、自分も心を惱ましてゐた。それは、明るい月夜も、苦しい心は闇のやうにしか見られなかつた、といふのである。

吾妹子に戀ひて術なみ白細布の袖反しししは
夢に見えきや　　（問）

吾背子が袖反す夜の夢ならし
逢へりし如し　　（答）

「袖反」といふのは、懷ふ人を夢に見ようとするわざ事である。女が戀しくてどうも仕方がない、せめて夢で心の苦しさを知らせたいといふのである。結句、「夢に見えきや」は「夢に見たか」と問うてゐるのである。そこで答へた歌であるが、あなたが袖反したわざ事

が、夜の夢となつて私には感じられたのであらう。君とありありと逢つたその夜の夢は、本當に逢つたやうであると言ふのである。以上四首は卷十一所載のものである。これだけの問答歌は甚だ單純でよいが、集中にはもつと複雜な氣持を歌つたものがいくつかあらう。卷十二から少し引用してみよう。

紫は灰指すものぞ海石榴市の八十の衢に逢
ひし兒や誰　　（問）

たらちねの母が召す名を申さめど路行く人
を誰と知りてか　　（答）

問の歌を解釋すれば繁華な海石榴市の道で行逢つた女が目にとまつて、誰の家の女の子ぞと尋ねたことを歌つたのである。この歌の一二句は、代匠記などの解釋に從へば、「紫を染めるには灰をさし合せて染めるなり、其灰は椿を用ゐれば椿市と云はむためにかくは云ひかけて又下のあふと云も其緣なり」と記してゐる。この作者はなかなか世事に長けてゐたのであらう。「紫と灰とは似付べき物とも見えねど能相ことの男女の中も思ひよらぬが

相逢戀の習のおかしきなり」云々。これらの解釋も面白いと思ふ。紫者云々は椿市の序であると簡單に言へば言へるのであるが、「ムラサキ」と言ふ詞にはなかなか作者の情が籠つてゐるのである。さて答への歌であるが、問はれたその女の子は、まだ父母の膝下に居る娘子であつたのである。「たらちねの母が召す名」と言ふのは、父母が呼ぶ自分の名は言ふのである。いま自分はその名は告げまゐらせようと思ふが、あなたは路行く私がどのやうな者かを知つてお問ひなされたのであらうか、と言ふのであらうか。「路行く人」と言ふのは、衢の道を歩いてゐた自分、それを客觀的に言つてゐるのではあるまいか。それとも在來の解釋の如く、路上で行逢つてゆくりなく自分の名を問はれたが、誰人であるかその人を知つて、早く自分の名は申上げよう。と言ふのであらうか。

すべもなき片戀をすと此の頃に吾が死ぬべきは夢に見えきや　（問）

夢に見て衣を取り著裝ふ間に妹が使ぞ先だちにける　（答）

問の歌は、片戀に疲れてゐる自分のこの頃の心は、死ぬ程に苦しい。かうした懊惱する自分の姿が夢にあらはれてそなたに見えたかどうか、と言ふのである。この歌では、女が先にかう言つたと解すべきであるが、どうもこの歌は女の作ではなささうだ。そこで答の歌になるのだが、何か心に觸れた夢をみたので、いそいで妹の許に行かうと衣を取り裝うたところが妹から使が先立つてやつて來たと言ふのである。片戀の苦しみであつたならば夢などを見ないであらう、夢にみた以上は、深く心に思つてをればこそ云々である。かうした問答歌をいくつか解釋しながら思ふことなのであるが、はたして、問答歌と言ふものは、純粹に男女の歌人によつて成立してゐる作なのであらうか、それとも一人の歌人によつて創造された問答體の作も幾つかはあるのであらうか。これには古來様々な説もあると思ふが、そこを讀者はよろしく心に置いて鑑賞すべきであらう。

卷八に、左の如き短歌がある。左註をもそのままに記載してみる。

佛前の唱歌一首

時雨の雨間無くな零りそ紅にほへる山の
散らまく惜しも

右、冬十月、皇后宮の維摩講に、終日大唐麗等の種々の音樂を供養す。爾乃此の歌詞を唱ふ。彈琴は市原王、忍坂王、（後賜二姓大原一也）眞人赤麿（一也）歌子は田口朝臣家守、河邊朝臣東人、置始連長谷等十數人也

「皇后宮」は「光明皇后」。維摩講の大會に終日右の短歌を樂器と和して唱ふといふのであるが、いかなる聲を上げて唱つたか、その節が後世に傳はり、現代に於いてそれを識る事が出來たならば、甚だ興味深いものがあり、短歌史の上に、相當重要な問題として取扱はれた事と思ふ。この左註の文章の上で看る如く、この短歌を、かくの如くにして歌つてをり、市原王の「彈琴」はまさに天下一品の觀がある。市原王は『一つ松幾代か歷ぬる吹く風の聲の淸めるは年深みかも』の作者として有名である。そこで此歌は當時のいかなる歌人の作なのであらうか。同時に此歌の內容は、維摩講の大會にいかなることを語らうとしてゐるのか、それはいま知るよしもないが、この歌の意味は、時雨があまり多く降つて

は、山の紅葉の色が褪めてしまふ、ゆゑに、時雨が續いて降らぬやうに、と言つて山の紅葉の散り過ぎてゆかうとするのを惜しんでゐるのである。短歌といふものがかういふ風に取扱はれてゐる事實は、萬葉集中幾つかある。或ひは短歌といふものが、竟宴などの折に於いて卽興的に發表される事もあらうし、傳誦された古歌などによつて發表される場合もあるであらう。

問題を少し變更して今回は述べてみよう。現代稱へられてゐる「短歌」といふ名稱は一體何時ごろからなのであらう。萬葉集では「短歌」と言うてゐるが、德川期に於いて「短歌」なるものは所謂「和歌」と言つた。それが明治の代までも續いて、雜誌「明星」の末期あたりから、正岡子規の「根岸短歌會」なるものの名稱が歌壇に擡頭して、雜誌「アララギ」などの發達と共に短歌といふ名稱が歌壇の通用語となつていつたのであらう。此の經緯は他日詳しく述べようと思ふ。

短歌を、「風流の道」「敷島の道」であるとする考へ方は、現代においてすら、一般的の解釋であつて、百人一首の歌を以つて、「短歌」―「和歌」―の骨髓を述べようとする傾向

がそれである。「短歌といふもの」の概念が、「敷島の道」「風流の道」として考へられた時代は、人情の機微に觸れた一風詠を指して、大歌人の面影を云々してゐた。或ひは、人間が生死の境にあつて詠んだ歌、それは多く武士などによつて試みられた風習であり、辭世歌ともなつて一般社會人の讃嘆の對象となつてゐた。短歌、つまり和歌に對する概念はかういふところにもあつた。それに價値標準を古今集、新古今集等におき、萬葉集などは一般歌人の信ずるところでなかつた。さて萬古不易の萬葉集の歌が、何時から現代の歌人の腦裡に深く印象されてきたかといふに、やはり正岡子規の歌論に負ふところが多い。そして正岡子規の作品の發表であつた。子規が病牀で呻吟しながら短歌の道を新たに拓いたといふ一事は人間としての子規の偉さであつた。一方に於いては萬葉集の研究の隆盛となつて今日に及んでゐるのである。或ひは短歌雜誌に據る短歌の發表が、多く集團的となり、一般の結社を構成するやうになつて、おのづから歌壇の上に流派といふものが生ずるやうになつていつた。

そこで、現歌壇の一般の情勢は、萬葉集の調べの上に、短歌本來のものを示し得るとな

して、古今集新古今集等の上には、高い價値をそこに認めようとはしないやうになつた。から斷言しても現歌壇の人々は異説を唱へる人すら無いのである。しかし人間には、古今集の調べのごとき甘美的なものを好む一面があるゆゑに、古今集の調子のおもしろみに賴つて短歌の本質をそこにすら認めようとするのは否めない事實なのであらう。であるから、萬葉集の信者の多い歌壇にも、古今集の信者も相當まじつてゐることは想像して考へねばならぬ。

そこでかういふことが言へるであらう。萬葉集を肯定して、古今集を否定してゐる歌人も、一度は古今集の味ひに觸れてゐるのであるから、否定しながらも古今集から學び得るものは確かにあつたと言ひ得るのである。ここに「短歌」の發展の經路がある譯である。そこで結論としては、「短歌」といふものにとつては、萬葉集も讀み、古今集も讀み、そこに技法の一端を會得すればよい。おのづから萬葉集の歌が好きになつた時にその人の歌は進歩する。

ところが最近の經濟思想の發達から、その理論の影響として現歌壇の上にも、經濟思想的の短歌といふものが唱へられてきて、無產的短歌といふものが、萬葉調の短歌を否定してくるやうになり、マルクス主義などから移行した理論の下に三十一文字の短歌の形式を打破して、一種の新短歌を唱へる人々が多くなつた。この思想は、文壇から注入されたものであつて、子規のごとき偉大なる人があつて歌壇に影響を與へたのではなかつた。いま新短歌を作りつつある人々は、この後どのやうに發展してゆくかは知る限りでないが、短歌といふものの世界へ、かくの如き經濟思想的の短歌が生じてきたことはむしろ自然の成行と看て、あるところまで萬葉集の信者も注意してをつてもよろしい。萬葉を讀み味ひながら、さうした異色ある短歌の傾向を眺め、いづこかに流れてゐる短歌としての本質を語らうとするものを見出せばよい。そして、自分の作歌の上に攝取すればよい。

いまここで經濟思想的の短歌と言つてゐるが少し變な言ひ方なのであらう。つまり現代の經濟觀念からおのづから影響された、社會意識と言ふものを、攝取したところの短歌と言ふ事に他ならぬ。これらの短歌の形式はたいていは口語體で發表されてゐる。以上で、

現代の「短歌といふもの」の傾向をいささか述べたと思ふから、この話を轉じて、所謂口語體の短歌の形式の中に感覺といふものに重きをおいて、人間の異常な神經を働かさうとする西洋詩のやうなものの存在をここに述べようと思ふ。現歌壇の上に、著しく自己の個性を發揚しようとしてゐる作者に、前田夕暮氏の在る事を吾々は記憶してゐるであらう。一例として夕暮氏の最近の作品を檢討してみよう。

あく石を口にふくんで、ぶつぶつと物をいふ
老婆のやうな村落の横顏

短歌の形式に絶對に信賴を持つてゐる短歌作者は、このやうな短歌といふものを或ひは否定し去るかも知れぬ。然し現代の歌壇に生きる人々は、かういふ形式も短歌の領域に入れて味はつてゐてもよいのであるからかういふ歌を作りたい人々は、これで氣持が滿足するならば、このやうな歌でもよいのではあるまいか、だがかうした表現が相當の年輩の人々に多くあるとしたならば、これは人間の生きて行く上に考へねばならぬことである。前田氏が、常に、自己の感覺をこのやうに活動せしめてゐると云ふことは、生理的に考へて、

餘りに疲れを感ぜしむるものがありはしまいか。くだいて言ふならば變つた角度から自然を觀よう觀ようとするその努力は、まさに大きい神經の浪費とでも言はうか。これは藝道に生きる上に重要な問題なのであらう。しかし、かうした表現法は、可成り多くの人々によつて試みられて來たものであり、所謂、西洋詩の模倣とでも言つてよいのであらうから、考へ方に據つては、樂な氣持で作つてゐるとも解されるのである。この歌は貧村の一風景を、老婆の顏の如くに作者が感覺して詠んだものであつて、繪畫からヒントを得た自然の橫顏なのである。

カリエスで歪んだ背骨の上を、石灰貨車の奴、
ゴトリ、ゴトリ歩く

石灰貨車を、奴といふ詞によつて調子の躍動を保たうとしてゐるのである。あたりまへならば、「石灰貨車ゴトリゴトリ行く」と言ふべきところを、「歩く」などと言つて、ここでも變つた趣を現はしてゐる。「カリエスで歪んだ背骨の上を」の表現も、山村荒廢の光景を示さうとする意圖の窺へるところなのである。

雪どけの赤い日だ、石灰がふる、ヨナがふる、ダ
ムがあふれる

これは、表現の上に素直さがあつて、自然の觀方にわざとらしさが無い。「赤い日だ」といふ表現には、稍少年流の感激が見えてこれでは嫌味となつてゐはしまいか。あたりまへならば、「雪解の赤い日のいろ石灰がふるヨナがふるダムがあふれたり」となるところなのであらう。

氣持のよいカーヴだ。このレールの光澤は春
でなければならぬ

レールの光澤、ここに作者の着眼點がある。氣持のよいカーヴ、これは野球戰に胸をときめかす青年流の感覺とでも言はうか、つまり春でなければこの感じは味はへぬと言ふ作者の詠嘆なのである。現歌壇の一部に在つての前田夕暮氏の作品は、短歌三十一文字の形式の反動として生れたのであるが、いつの時代に於いて、作者の全生命の窮極をかうした作品に據つて示されるか、興味ある問題でなければならぬ。

選歌餘談

原作の面影の全然見えなくなる迄に、一首の短歌を添削する人と、單に選拔すると謂ふ意味に於いて滿足する人とがある。この兩者の行方の、どちらが後進を裨益するかは、斷定できないが、添削といふことは、飽迄も自己の感情との一致を發見しなければ、滿足出來ない點に加へる推敲の意とも言へるであらう。それに、選歌といふものは、先づ歌はれてゐる一首の上に、どのやうな內容が含まれてゐるか、それを直感する丈の批判力が必要なのである。調子は甚だ亂れて歌の體をなしてゐないやうな作でも、その歌の底に流れてゐる作者の感情に、素直なものがあれば、それは、どこまでも、その歌を生かすだけの努力が、選者に必要なのである。又或る場合は、幾首かの作歌を全然無視して選拔しない事もある。それは、それらの作者の今後の製作を期待しようとする選者の心やりにも依るのである。でであるから、現在歌を學びつつある人々は、先づ、選者の歌風なり、選者の持論などをよく呑み込んで、飽迄、選者を尊敬してかからねばならない。

或る人は、かういふ事を言はれたさうである。拙い歌のみ見てゐると、自己の歌も拙くなる、云々と。これは一面理窟の立つ議論であるが、さういふことになると、後進者の歌は讀まなくてもよいことにもなつて、選者の存在も不要となる譯である。そこで私は、かういふ論者に向つて、下の如き理窟を提供してみようと思ふ。拙劣な歌でも我慢して見てゐるうちには、佳い歌を發見する事があるし、拙劣な歌の中にも人間の心の表現として一つの面白い實相が歌はれてゐるといふこともある。選者が、かうして拙い歌でも攝收してゆくといふのは、少くとも自己の創作力の上に、複雜な構想を與へられるといふ事になるのである。ゆめゆめ、拙い歌を見ると自己の歌が拙くなるなどと言つてはならぬ。以下拙い歌の幾つかを引用してそれを上等の歌に仕立てる實驗をしてみようと思ふ。作者の名は憚つて表はさない。

夕ばえの光とどける丈高き紫苑の花のゆた
かにゆるる

「光とどける」と言うて、直ちに、「丈高き紫苑」と續けた工合は、稍緊密性を缺いてゐるのである。ここのところは、「光とどける紫苑に」といふ工合にならなければ調子が出て來ないのである。「ゆたかにゆるる」これは、紫苑などのやうに群生して開く小花の狀態を表はす詞としては、甚だ拙劣なのである。そこで、右の歌を左のやうに添削してみる。

丈高き紫苑の花に夕ばえの光とどきて風に
さゆらぐ

このやうに添削すれば、幾分丈の高い紫苑の花に射してゐる夕映えの色が想像されるであらう。

花の鉢を雨の軒したに出しにけりいち日ぬ
れて花咲くが見ゆ

「花の鉢」では意味をなさない。「雨の軒下」も甚だ幼稚である。三句などへ續いてゆく調子は、拙い表現である。「花咲くが見ゆ」と言うても、何んの花やら分らない。右の歌を、もう少し上等の歌に添削してみよう。

草花の鉢を軒下に出しけるひねもす雨に濡
れて花咲く

嚴密の意味から言へば、草花の鉢だけではいけぬのである。草の名が分るといいと思ふが、さうなるとやや常識的になる傾きもあらう。

夕つ陽は山に沈みてうろこ雲長くはろけく
天足らしたり

「夕つ陽は」は、「夕べ日の」位にしておいた方がよい。「うろこ雲」ここでは、かういふ詞が生きて來ない。「天足らしたり」これも大仰である。「長くはろけく」かうした詞にも

問題は多くあるであらう。何んとか、右の歌を改作してみよう。

夕べ日は山に沈みてうろこ雲はろけく空に
たなびけるなり

調子の伸びやかなる所を看取されるであらう。

あれくるふ嵐のあとの靜けさのさまにも似
たる此の頃の我

熱情の昂まるままに歌はうとしてゐる所は見受けられるが、どうも全體の句法が騒がしい。それに比喩が甚だ幼稚である。かういふ歌は、全然句法なり、使用されてゐる詞を改めて添削しなければ生きて來ない。

おちつかむ心となりてこのごろは悲しみに
ける日もしぬばれつ

歌が大變異つて了つたが、稍現代風の歌の相を成したであらう。

交尾期をへし飼犬あはれなりむさぼり食
ひただに眠りぬ

割合に纏つてゐる句法であつて、添削せずともよい位である。少し改めてみよう。

交尾期をすぎし飼犬このごろはむさぼり食
ひ眠るあはれさ

幾分句法が細かくなつて調子が面白くなつて來たであらう。

事務終うる時間せまりてふと見れば空ひと
ところ夕燒にもゆ

「終うる」などとは言はぬ。「終ふる」である。しかし、一句「終ふる」でもいけぬやうだ。「事務終へむ」となるところであらう。「ふと」この詞は、なかなか歌の上では生きないのである。「夕燒にもゆ」もどうもここでは生きて來ない。かういふ詞を生かすには、餘程

の大きい感動がなければならぬ。

事務終へむ時の迫りて外見しに空ひととこ
ろ夕焼けてをり

室内の感じを表すにしては、原作の面影がやや失せてゐるやうであるが、そこは讀者に委しておいた方がよろしい。

生活(たつき)けはしきこの時節(とき)にしてなほ若き男女(なんによ)の死すは縁なきごとし

この歌は、複雑な事柄を、割合に率直單純に歌ひ上げてゐる。ただ歌はれてゐる感情に特異性が無くて、常識的とでも言はうか。かうした歌の上に、「生活(たつき)」「時節(とき)」といふ詞の使ひざまは少し要領がわるい。

生活のけはしき世にしてなほ若き男女の死すは縁なきごとし

かくの如く添削したものの、「時節」といふ詞には、いささか未練がある。

朝日かげいまだまのある草山の傾斜(ただり)の柵に
牛むれてゐぬ

此歌の拙いところは、「いまだまのある」といふ一句である。ここを改めれば幾分よくなるであらう。

朝の日のいまだ射し來ぬ草山の傾斜の柵に
牛むれてゐる

一二句は、やや不安を感ずるが原作よりいくらかよいと思ふ。

霧深き朝もはやく隣家(となりや)の盲(めしひ)榮次が子負ひて
歩く

小品文の味であつて、歌の調子が強く出てゐないし、一二句の表現が説明に近い。

隣家（となりや）の盲（めしひ）の子栄次子を負ひて霧ふかき朝を
出でて行きけり

結句は不安である。「霧ふかき朝をはやく外に出づ」或ひは「外に出でて遊ぶ霧ふかき朝を」讀者はよろしく判斷されたい。

本牧の海邊は暗し自動車はあやしげの家の
軒を走れり

「本牧」は横濱の本牧の事である。作者は自動車に乘つてゐるのである。「あやしげの家の」とか、「軒を走れり」は甚だ言ひ過ぎてゐると思ふ。

本牧の海近き巷走りゆく自動車は家の軒に
にひびけり

「軒にひびけり」は原作の、「あやしげの家の」と言ふ感じ方とやや異るが、「あやしげの家」などと言はぬ方がよろしい。

添削の實例はこの位に止めておいて、少し又感想を述べてみよう。

選歌するといふことは、單に歌そのものを看て添削なり、批評をする場合と、面前に歌の作者を置いて選歌をする場合とがある。どちらかと言へば、面前に批評すべき歌の作者が居つた時は、その作歌した時に於ける態度なり、苦心を直接に聽くことができる故拙劣であつた歌でも、あるところ迄引き上げて生かせられるやうである。然しその時の作者の態度に不忠實なものがあると、その作歌をも添削するの勇氣を缺く事は、人間としてやむを得ぬ心情であらう。これに反して、歌のみに接して選歌する場合にあつては、その作歌當時に於ける工夫なり、態度を聽く譯にはいかぬ爲に、いきほひ、簡單に選歌する事になる。然しこれでは選者の義務が果せぬから、一層嚴密に看ようとする。かういふ時に、拙くとも内容に閃めくものの存する歌を直感するだけの力が選者に必要となつてくるのである。

私は、島木赤彦先生から歌の道を學んで、今日では、自分が歌の道を語らうとするやう

になつてゐるのであるが、私が島木赤彦先生に作歌を毎月見ていただいた頃は、實に字が拙劣であつて、原稿用紙に忠實に書き記して行つた歌でも、先生は可成り讀むのに苦心せられたやうであつた。拙い字で書かれた歌程添削が困難である許りではなく、嫌なものは無い。それを先生は目を皿の如くして、この字はかう云ふ字なのであらうと、下手な字の傍へはつきり書いて下さつた。その上で私の歌を看られた事が度々あつた。私ばかりではなく、中村美穗君などは、「さ」といふ假名を、「ち」と書いて持つていつた。だから、中村君の歌は、はじめのうちは餘り判らない字があるので、佳い歌も悪い歌にされて、沒書の憂目にあつたらしいが、次第にさうした判りにくい字で書かれた歌ではあるが、一所でも訂正すれば佳い歌になる本質を、先生は發見された。中村君はかうして生長して行つた人であつた。無論、私も中村君と略同じやうな事をやつてゐた一人であつたのである。以上は一例に過ぎぬが、島木赤彦先生の選歌態度といふものは實際嚴肅であつた。

選歌する人と、選歌される人、この二つの存在は、歌壇の存續する限り、特に結社雜誌

の歌壇に在る限り存續する事實なのであらう。ここに於いて短歌を發展せしめる爲には、たがひに歌を通して心情の交換を求め、創作力を刺戟し合ひ、兩者の旺盛なる活動を實現すべきであらう。

私の過去に於いて選歌した、その歌の中から佳作と思はれさうなもの、或ひは問題となりさうな歌をいくつか抄出して批評してみよう。こんどは添削ではなくて、かつて發表された歌に就いての思ひついたままの感想程度に止まる批判である。作者の名は表はさぬ。

1　ひと山をこえゆきてなほつづく山　ただひろし草枯れの山

2　枯草の山原とほくこえきたり古き火口に若ふみあそぶ

(1)の歌は、草枯れの山を幾つも越えても、直ぐ目の前に草枯れの山が續く光景を歌つてゐるのである。かうした種類の歌としては甚だ平凡な表現のやうではあるが、草枯れ山の

狀態の中に、よく心の律動を摑んで調子の上に生かしめてゐるものがある。(2)の歌は、舊噴火口とでもいふ所を、「古き火口」と云つてゐるので、つまり作者は、枯草の山原を遠く來て、舊噴火口近いあたりの苔を蹈んで遊んでゐるところなのである。此作者は、山國の人である故、特に山嶽風詠にあこがれるところが無い爲に、歌柄が素直で自然である。

身ぬちにこもる熱あり山川の渦卷ける流れ
にからだしづめし

この歌は、佳作とまではいかぬが、境地が甚だ異つてゐる故、選者としていささかそこを語つてみたい。「身ぬちにこもる熱」これは作者が風邪でもひいてゐるやうであるが、風邪をひいてゐる身でありながら渦卷ける川の流れへ入るなどとはあり得べき事ではない。つまり時は夏の暑い盛りであつて、神經が異樣になつて、なにか身ぬちに熱でも籠つてゐるやうな心持がしたのであらう。山川といふけれど、この川は、水瀨の激しい淺い川であらう。渦卷けるは大仰のやうであるが、作者の神經はさう言はずにはゐられなかつたのである。一首の作に、これだけの感想を述べさせるだけ、つまり此歌には異樣な感じがあつたと言ふことができる。

1　電車下りて海ひろびろと見とほしに浚渫船
　のひとつ間近に

2　高く見ゆビルヂングの時計鳴りいづれ暑き
　十字路を人の群れたる

(1)の歌は、電車を下りてきて、海が見えたのであらう。廣い感じがして目の前を見ると、すぐ近くの海の上に浚渫船が一艘浮んでゐたと言ふ。この歌も相當にかうした境地を單純に表してゐる。(2)の歌は、人の群れてゐる其間を、自分も歩いてゐると、ビルヂングの時計が鳴つたと言ふのであつて、群衆の騷音の中から、聞えてくる時計であるから、相當に大きい時計なのであらう。作者は、時計の音を聞いてから高いビルヂングを仰いだのであらう。

立ち對ふ海ほの暗きこの夜半の砂漠に露は
降りわたるらし

この歌は、歐洲航路吟の一つで、「紅海」に於いての作である。「立ち對ふ」は自分の乘つてゐる汽船の上に於いてといふ事なのである。夜半の海を航行してゐて、ほの暗い海波を作者は見入つてゐるのである。そして、海の上から近いアフリカ大陸の砂漠の夜景を想像してゐるのである。ああ、砂漠の上には露が深く降りてゐることであらう、といふので、甚だ羨ましき歌境である。かういふ歌境はまだまだ發展の餘地が充分にあるから、作者は海上生活の基礎を確かにして、短歌の製作に精進されん事を祈つてやまぬ。

短歌をおもふ

なんとしても、歌を作る心が湧いて來ない場合は、旅行をしてみるとよいと云ふ人と、酒でも呑んで遊びまはつてみるがよいと云ふ人とがあるのですが、これは單に氣休めに止まつて、たいして意義がありません。それならば、歌心の湧かなかつた場合はどうしたらいいのかと云ふことになるのですが、先づ萬葉集を讀むのがよいと云ふ事になるのではありますまいか。つまり歌書によつて歌心を釀成するのです。これは、相當に歌を作れるやうになつた人に言ふことなのですが、極く初心者は、歌心が湧かぬと云ふ苦勞などはしないものなのです。初心者のうちは、どうかして歌を一首ものにしてみたいと云ふ觀念があつて、それに、五七五七七といふ形式に據らうとしてゐる爲に、歌心が湧くとか、湧かぬとかいふやうなことは問題ではないのです。ところが少しでも歌を作る呼吸を悟つ

てきて、五七五七七と指を折つて形式をまとめなくて濟むやうになりますと、どうしても先進の佳い歌の味や、古歌のよい味などが想はれてきたりなどして、むやみには自分の歌が作れなくなるのです。かう云ふ心持の經驗は、歌の道に遊ぶものにとつて、幾度も逢着する問題なので、その爲に途中で歌作を中止して了ふ人も尠くはないのです。こんな時に我慢して歌を發表することを怠らないがいいのです。拙い歌でも發表しておくのがいいのです。そのうちには又一方の道が拓けくるものです。

そこで歌心といふものなのですが、この歌心と云ふものは、一種の寂しさなのです。一種の寂しさといふものはどんなものなのでせうか、友達同志の交際がうまく行かなかつたり、父母に遠く離れてをるとか、戀愛とか、身邊に不幸を得たとか云ふ場合に起る感情、かうしたことも心の背景となつて一種の寂しさにもなるのです。其他種々ありませうが、かうした感情からくる寂しさも、人に對つて打明けてしまへば氣もはれるのでせうが、人の前に打明け得られぬ寂しさもあるものです。かういふ時、歌などを作つてゐる人は甚だ都合がよいので、さういふ感情を三十一文字の形式の上に托します。ところで、發表する

喜び、表現した歡び、これは充分必要な條件です。それから、歌と云ふものを信じる事なのです。歌と云ふものを、自己の生涯と結びつけるだけの努力が必要なのです。明治から大正、昭和の今日に至つても、歌の爲に自己を虚しくして一生を終へて行つた人は尠くはありませぬ。然しです、歌と、人生と云ふものは、それ程密接なものであるかと云ふ問題なのですが、歌の道に携つてゐる人々にとつては、密接なる關係があると信じて、充分に體驗してみてもよいと思ひます。

ところで寂しさと云ふことなのですが、これは歌などを作らぬ人々にもある共通心理なのですが、特に、歌を作つてゐる者にとつては、この寂しさはなかなか重寶なのです。それ故に、この寂しさを失はぬやうに、そして、その寂しさに堪へてゐられるだけの心の用意が大切なのです。常にかうした用意があると云ふ事は、歌を作る人々のみにとつて大變得なことなのです。

歌の問題は數限りなくありますが、この邊で擱筆しておきます。（昭和八年二月五日）

「紫草」概評

「紫草」一巻は、すでに若き日を過ぎて、社會の現實相に直面した頃の作歌の集成であつて、着想の健實さと、所謂、アララギ流の色彩の強さを以つて押進んでゆかうとする努力の窺へる歌集である。

百日咳せき入る乳子を膝におきてせんすべ
をなみ見守る我は

これは、大正七年「故郷にて」の一連から抄出したのであるが、歌はむとする對象を觀るのに、いかに素直な心となつてゐるかが窺はれて、すでに母としての情味を歌の上に移して遺憾なきところがある。大正七年と言へば、アララギ全體の歌風から推して考へてみても、當時は、句法の上に大きい努力を續けてゐた時代であつた。聰明な作者にとつてそ

れが素直に受入れられたのは當然であると言はねばならぬ。

芽を吹きし楓やうやう薬となりて影をなす
かも庭の片隅に

「影をなすかも庭の片隅に」に寫生風のところがあり、當時にあつては、かういふ表現は、一種の澁味とも言はれて、賞讃されたのであらう。かういふ自然の觀方は、やはりアララギ流なのである。

風吹けばしきて落葉の音ぞする障子の外を
一日見ざりし

下句の表現に此歌の生命があるので、何か人生の虚しさを傳へてゐる作である。

素足もて崖にかき登る人にまじり遊女の在
るはあはれなりけり

人の世ははかなきものか軒の端のこの櫻木
の蔭に眠るも

右二首は、關東震災の折の歌であつて、詞書にもよる如く、「入院中の長女を見舞中、震災に遇ふ。」とあつて、その病院よりの歸途、新宿裏所見の歌である。この歌の調べの中には、驚きとともにさうした光景に伴ふ靜寂感、それをうまく自己のものとして表現してゐるところがある。かういふ境地を捉へたのは、やはり作者の現實的の歌風が基底をなすのである。

いとけなき吾子が面わも昨日今日
はれに勞れて光れり

震災は、世の中を騷然とせしめ、人の神經を戰慄せしめた。無關心に生きるいとけなき子の神經すら、それに怯えたのは當然であつた。この作者は、さういふ所に目を付けて次の境地まで引上げてゐる。

庭の木に啄木鳥あさる山の家姉の明けくれ
をしみじみと思ふ

この歌は、たしか發表當時合評されたとおもふ。結句あたりが問題となつたかも知れぬ。

ではあるがこの歌の底には靜寂味がある。この作者としての大事なものが含有されてゐる。

大正十五年に島木赤彥先生が逝去された。先生の逝去は、この作者にとつても大きい動搖でなければならぬ。「赤彥先生」の一連は、赤彥先生臨終に近き折の詠嘆であつて、臨終の光景を、さすがに女性らしきつつましさに於て表現されてゐる。

道芝に露の光はありながらふみのぼる山あ
つき日させり

この一首は優れてゐると思ふ。或ひは、自分の好みから來てゐるかも知れぬが、感じのよい歌である。他にも優れた歌があると思ふが、「紫草」一卷は、どこかに複雜味を持つた歌の多い歌集である。もつと精讀してその複雜味ある作を擧ぐるのは、評者の責任であるかも知れぬ。

（昭和七、九、十五、

歌をよむ生活

「歌をよむ生活」とは、最近私自身のみの問題である。しかし與へられたものの如くにも考へられる。これをどのやうに取扱つてよいものやら、いま確乎とした、條理の立つた結論が浮んで來ない。この問題がせめて心の中だけでも條理立つたものが生じてくるとよいがこれには、相當年月のかかる事であらうと思ふ。それには私はもつと考へねばならぬからであらう。手つとり早く言ふならば、純粹な歌をよむ生活は容易でないと言ふことである。だが純粹な歌をよむ生活をしたいと言ふ願望は、歌の道に入り込んだ者にとつて、一度は深い問題の一つとして經驗さるるべきであり、考察を要すべき時もあることでもあらう。縱んば將來、純粹な歌よみの生活が營めないとしても、生活を營めると言ふ信念は、青年が有つ希望の一つとして或場合は大切に考へねばならぬ問題である。私は今から十年

程前のアララギ誌上に、左のやうな感想文を發表した事がある。

「ほんたうに社會的の生活に融通のきかぬ私はせめて歌といふものの中に生くる可き心を神樣は與へて下さつた。私はその中に私の宿を作らう。父は私のかうした行爲——考へ方——を迎も多くの妹弟を養つて行くに不適當のものであると心配してゐる」

（アララギ十四卷九號談話欄）

文章に甘い個所もあり、讀んで忸怩たらざるを得ない。讀者はそれを寬大に看て貰ひたい。唯、今の私にとつてこの文章は少し參考になるところがある。單純な內容であるが、當時の自分の心持をここから推察出來る。歌をよんで生活し得らるるものであるかといふ問題に逢着してゐたことが知られる。その背景として自分は多くの家族のことを取入れて心配してゐることも知られる。父のことなどが引つぱり出されてゐるのは、私が長子であるといふ考へが强くあつた爲なのであらう。また教育程度の低い素養の足らぬ自分を、恐らく文筆で生活し得らるるものでないといふ考へは父としては深かつたであらうと思ふ云々、の問題である。そこで父はいつかは、かうした子の思想（かんがへ）——歌をよむ生活への憧憬は

消滅して了ふだらう位には思つてゐたに違ひない。ところが十年後の今日に及んで、再び十年前に苦んだことを、ここに引合に出さねばならぬ羽目になつて了つたのである。或ひは現在の私の苦しみは、十年前よりも純粋でない苦しみが加はつてゐるかも知れない。考へが通俗的に傾いてゐるかも知れない。それを責める人はあるであらう。私はこの通俗的の事實を責める人があつたならば、甘んじてその前に立つて、私の感情を述べる事を控へまい。

生きるためには、人は鶴嘴を持てといふ。但し私の身體はそれ程頑健では無い。私はそれを克く知つてゐる。私には鶴嘴は持てないであらう。然し生きる爲には、持たなくてはならぬ時が來ないとも限らぬ。それでも多分鶴嘴は持つまいと思ふ。私には歌をよんで生きねばならぬといふ考へが強くあるでは無いか。乞食であつても歌をよんではならぬ事は無い。世人はこの私の突飛な言葉を嗤ふであらうが、この言葉は現在の私にとつて僞りでない事を特に言つておく。ただ考へねばならぬ事は、以上の私の述べた言葉の意味を、深く判斷する處も無くて、少くとも私よりも後輩の人が歌よみの道をそこに求めようとするのは危ぶまねばなるまい。もしも歌をよむ人々の間に私の如き考へが瀰漫したならば、相當考慮しなくてはならぬ問題が生じて來るであらう。言ふことを勝手に擴げて了つたが、現歌壇に集つてゐる人々や、外邊から觀てゐる人は、偶にはこんな考へも思ひ出してゐる事であらう。ただただ短歌は、現代においても、相當優れた位置へまで引き上げられる藝術的要素を充分に備へてゐるゆゑ、歌壇人はそこを深く考へるといい。正岡子規の俳句が當時、時流を超えた藝術的要素があつたと同じやうに。

そこで問題を縮少して、自身に立入らねばならない。私はいま明らさまに形式は狹くとも自身の姿を俎上に載せてみよう。追て具體的の問題は他日別の形式で書いてみよう。私の友達は皆生業の傍ら歌の道を精進してゐる。私の十年に近い歌への生活は、自分の生業の大半を費やし、どつち付かずの狀態の下に經て來た。その一方を捨てようとする理由は、歌をよむ生活へ專心進むがよいといふ機會を與へられ、それに據つて耐へられぬ苦痛を感じたからである。ここ迄來ねばならぬ私の宿命なのかも知れぬ。これが私の宿命としたならばあまりにも寂しい社會人としての生活だ。これでよいのであらうか。短歌本來の

道は、かうするのがよいのであらうか。或人は私のかうした行爲を默認してゐるやうであるが、內心滿足し得ないものがあるであらう。私はいま時間の餘裕あつて原稿紙の上に字を書き記してをるが、父や弟達は汗を流して立働いてゐるのである。これでよいのであらうか。歌をよむ生活のこの不安定よ。

傍らに生業を持ち、歌に精進するのはよいことであり、自然な發達があり、作歌上の弊害が伴はぬ。然し作歌上に行き詰りのある如く、自然の發達の上にもいつかは行き詰りがあるべき筈だ。團體の上にも、個人の上にも。

以上の感想は、初めにも述べたる如く、私自身の問題である。この問題は、私の最近の環境より得た結果である。或ひは私自身に氣が付かぬところのある世迷言であるかも知れない。この世迷言は、私を明らかにする爲に、その環境を明らかにする爲に、自身を俎上に載せることに據つて、おのづから消滅してゆけばそれでよい。この問題が自身の中に消滅しないばかりでなく、無限に續くならば、飽迄私自身が藻掻き苦しむ事であらうが、これも仕方がない。自身生きる爲に、記錄を殘したい爲に。

（昭和六年四月記）

歌よむ者の日記

日常の思索や、體驗をいちいち覺え込んで書き殘しておいたら面白いと思ふが、偖その實行はなかなか僕にとつては容易でない。そこで一日机の前に坐つて何か考へるまま、感ずるままにペンを執ることにしてみる。

常に歌を作ることのみを考へてゐる者にとつては、感じた事は餘り外へ發表せずに腹の中へ藏めておく方がいいのであらうが、此頃は何故か腹にあるものを外へ出してみたくて仕方がない氣持がしてゐる。僕の腹の中にあるものを外へ出してみたところで、世の中が變るものでもなし、人心の變動をみる譯ではないが、此の心理作用は、晩年の芥川龍之介氏の心持といくらか似通つてゐるとも言へる。芥川氏は博學多才で、犀利な感受性があつた爲に、うまく自分の氣持を外へ表現しては、幾分その心を慰めてゐたらしいが、それに

引きかへて、僕の如き知識不充分な者は、そこが理論的にうまく組立つて來ない爲に、「例へば」と言うて、一つの實例を以つてその心持を説明はできない。まあ、その代り僕には、歌といふものがあつて、幾分感情をうまくやはらげてくれるので滿足もあるのだが、歌だけではどうも物足りなくて、散文を作つてみたり議論を書いてみたりするのである。良寛のやうに、歌ばかり作つて食つてをられればいいが、いまの世の中はそれも出來ない。

僕の如く知らな過ぎても困るが、芥川氏の如く知り過ぎて了つたのも困るであらう。知識の處置に困つたといふ風である。だから谷崎潤一郎氏などとの晩年に於ける論諍は、あらゆる自分の腹にあるものを引出してゐるので、傍證付でなくては分らぬ引例が澤山出て來てゐる。芥川氏のあの文章の中に盛られてゐる知識は、四五十年間位かかつて溜めておいた種のやうなもので、苦しまぎれの種明しのやうなものではなかつたのか。あの頃森鷗外などといふ人が生きてゐて、あの文章を讀んだら、芥川氏は忠告されたことであらう。あれは早く言へば、騒然とした當時の文壇の一面を代表したものであつて、芥川氏の精神

力はそれを大觀し得なかつた。芥川氏は道徳的觀念の強い人でなかつたらうか、芥川氏に若し長年の齢があつたなら、あの不道徳的らしき作品に力が加はつて、整然たる氏の人生觀が窺ひ得られたことであらう。ともかくも芥川氏の生涯は、覺えたものの締めくくりの努力であつた。この締めくくりが讀書力の強かつた芥川氏には、容易でなかつたのかも知れない。今の文壇は、明らかにこの芥川氏の惱みを一般的に通俗化してゐるやうだ。表面は健康的であるが、頭の中のものは何んでもかんでも發表しなくてはならぬといふ病的心理だ。この病的心理をいくらか受繼いでゐるらしい僕は、覺え立ての知識をふり廻したい。大人の心に通はうとする時の童心に似てゐるかも知れない。

僕は小説といふものはさう高く評價できない氣がしてゐる。小説家が女の心理を語ることや、作者はどこにも見えず、女と女との會話などが綴られてゐるのを讀むと、どうしても可笑くて仕方がない。それだからと言うて、それを輕蔑したり、絶對に小説不可論を唱へたりするのではないが、少くとも、小説は、謊を書かねばならぬから嫌である。ただ小説を讀んでゐる間は、こんな社會もあるのかと思ひながらも、それによつて僕は、寸毫も

人と人との交流を暖められない事實を發見してゐる。小説を讀んだり其他の書物に目を通してゐる所謂知識階級の少し頭のいい連中は、さういふ知識から享けた社會的觀念を持つて人の心を看ようとする。かうした觀念が往々個人々々のつき合ひの間にあつて破綻を生じてくることがある。僕は、一日に於ける人と人とのつき合ひは極めて愼重に取扱つてゐる。僕の前で出鱈目を言ふ者があつたなら、その人が、出鱈目を言はぬまでつき合つてみたい氣持でゐる。僕とつき合つてゐる人々には惡い人がゐないと思ふから。それに、人と言ふものは話合つてみれば一番よく分るから。書物の上だけでは、なかなか人の心は分るものではない。そこで僕は、現代の文藝といふことに就いてかう思つてゐる。日本の現在の文藝は、理論的機智を弄してゐるから、そこから脫却して、もつと單純な、そして素直な、非學問的な、分り易い人生の交流を表現する作品が生れねばならないと。

僕は、十年ほど前に、森鷗外先生のお宅へ島木赤彥先生の使で、北條霞亭の原稿をいただきに上つた事があつた。赤彥先生からの手紙をお渡して、玄關にしばらく待つてゐると赤彥先生からの手紙の內容は抜いて、その封筒の中へ北條霞亭の原稿を入れて、鷗外先生

自身それを持つて玄關まで出て來られた。そして笑ひながら片手にその封筒を振るやうにして僕に渡されたことを覺えてゐる。僕はその時、純粹な心持でゐたが、鷗外先生變なことをするな、持つて行つた手紙の封筒へ入れなくても、他に封筒がありさうなものだと思つた。封筒の無くなつた赤彥先生の手紙が何故か氣になつて仕方がなかつた。

その頃、齋藤先生が信州の富士見に保養されてゐて、脚氣の藥を買つて來てくれろといふ先生のハガキが赤彥先生の許へとどいた。赤彥先生が歸國の際富士見驛で齋藤先生に車中からその脚氣の藥を渡すといふ話であつた。その脚氣の藥を四谷の灰吹屋へ買ひに行つてくれろと、僕は赤彥先生から賴まれた事があつた。勿論その藥を買ふにはそのハガキが必要だつた。齋藤先生のハガキを神樣の御札のやうに大事に懷中して、藥屋へ出かけて行つたことを覺えてゐる。であるから、僕の尊敬して止まぬ赤彥先生の手紙を、中味だけ抜いて、同じ封筒の中へ原稿を入れて寄こした鷗外先生の氣持が今でも判らないのである。こんな話をして何も鷗外先生を非議するのではない。寧ろ僕のやうな者が、森鷗外といふ先覺者に逢つてゐると云ふ事は、誇りでもあり、嬉しい事でもあり、僕としては記錄に留

めて置きたい事柄なのである。僕が偉くなれば意義ある挿話ともならうが。

小説の話が變なものになつて行つたが、兎も角も、小説といふものは、白頭の老人が作るもんぢや無い。若いうちに作つておく可きものだらう。赤彦先生も冗談のやうに、「俺も小説を作るよ」と言つてをられたが、赤彦先生には小説は作れなかつたであらう。赤彦先生が小説を讀むといふことすら可笑しい氣がするのに、ましてや作るといふやうな話になるとどうも冗談に聞えて仕方がない。僕等の歌を作る仲間には、小説をも作つてゐる人々があるが、なるべく事實に卽し、自分の體をぶつつけて書いて貰ひたいと思ふ。論理的機智の飜弄といふやうな事を餘りやらずにやつて貰ひたいと思ふ。

かういふと僕が偉さうに見え悟つてゐるやうに見えるが、僕は、現在、僕と遊びを共にするにしても、仕事をするにしても、眞實ものを言ふ人と交流を溫めようと思つてゐる。偉さうに聞えるのは、一種の正しい人を呼びかける戀愛に似た聲なのである。（六・五）

短歌の技巧

短歌は、詞を生命とするものであるから、國語に深い理解がなければ立派な作品は生れないと云ふ說は、旣に常識であつて、少しも新しい說ではない。ところが近頃の短歌には詞の理解よりも、取材の異常に重きを置いてそこへ何等かの暗示を求めようとしてゐる風がある。是は已むを得ぬ時代の傾向であつて、一度かういふところへ入つてみて、歌を作つてみねば、現在の歌の傾向は理解されないかも知れぬ。然しこれは、正岡子規も一度は踏んで來てゐる道であつて、唯、取材の範圍とその態度にやや相違してゐるものがあつた。子規は當時、新しき取材を歌の世界へ取入れようとする藝術改革の意識が働いたので、その藝術革新運動に伴ふ趣味的色彩の多い作品が發表されてゐるのである。歌は、結局一人の道を深く掘り下げる事に外ならない努力ではあるが、子規のその運動は大きい響と、效